筑波大学新聞

第338号
編集責任
筑波大学新聞
編集代表
福原直樹
TEL:
029(853)2040・6699
E-mail
shinbun@un.tsukuba.ac.jp
月刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市天王台1ー1ー1

衆議院選挙茨城6区・筑波大生

選挙区全体と大差

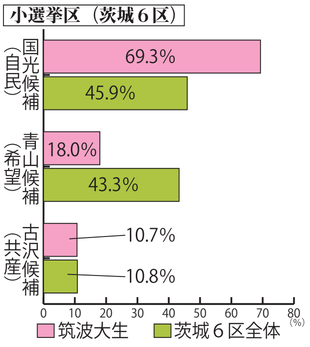
投票結果

150人に出口調査

本紙は10月22日投開票の衆議院選挙・茨城6区で、筑波大学生150人を対象に出口調査を行った。この結果、「自民党候補に投票した」と答えた学生が69・3%と、総務省が発表した同区全体の自民党候補の得票率（45・9%）を大きく上回った。また、比例代表北関東ブロックでも自民党に投票した学生は60%と、同ブロック全体の自民党の割合（33・2%）をはるかに上回った。支持政党も自民党が50・7%とトップで、筑波大生の自民党支持が浮き彫りとなった。

（石川泰行＝社会学類3年、4面に記者の声）

筑波大生と選挙区全体の得票率



判断材料「景気・雇用」を重視

今回、つくば市を含む茨城6区からは自民党公認の国光文乃候補、希望の党公認の青山大人（やまと）候補、共産党公認の古沢喜幸候補の3人が立候補。得票率は国光候補が45・9%、青山候補が43・3%、古沢候補が10・8%で、国光候補が僅差で当選した。

大学生と政治

出口調査は本紙記者9人が9時〜17時半、筑波大周辺の天王台・天久保地区住民が対象となる「つくば市立吾妻中学校」（つくば市天久保）の投票所で実施。筑波大生150人が「投票した」と答えた候補は自民党の国光候補が104人（69・3%）、青山候補が27人（18%）、古沢候補が16人（10・7%）。また、白票は3人（2%）だった。

また、比例代表北関東ブロックの投票先では自民党が90人（60%）と最多で、立憲民主党が21人（14%）、日本維新の会が14人（9・3%）と続いた。総務省による同ブロック全体の各党得票率は1位の自民党（33・2%）以下、立憲民主党（22%）、希望の党（19・3%）で、自民党を支持する筑波大生の多さが明らかとなった。支持政党も「自民党」と答えた学生がトップで76人（50・7%）、次いで「支持政党がない」が42人（28%）、立憲民主党が12人（8%）、白票が1人（0・7%）だった。

一方、投票先を選んだ理由（複数選択可）で、小選挙区で最多は「支持政党だから」が89人（59・3%）で、「政策を支持」が38人（25・3%）で続いた。また、比例代表でも同様に「支持政党だから」がトップの60人（40%）、次いで「政策支持」が53人（35・3%）だった。「どの政策を重視し投票したか」の問い（複数選択可）には、「景気・雇用対策」が68人（45・3%）と最多で、選挙の争点とされた「憲法改正の是非」は30人（20%）、「消費税増税の是非」は16人（10・7%）だった。

体操世界選手権 鉄棒

宮地 新技「ミヤチ」に命名か

史上最高「I」難度の大技決める

10月9日（日本時間）にモントリオール（カナダ）で行われた体操の世界選手権で、宮地秀享（ひでたか）選手（体育1年）が男子鉄棒の決勝で、「伸身ブレットシュナイダー（伸身コバチ2回ひねり）」を成功させた。その後の失敗が響き5位に終わったが、同技はそれまで国際大会で認定されていた最高難度「H」を塗り替える「I」難度の新技と認定。国際体操連盟から選手名にちなみ「ミヤチ」と命名される見通しだ。（佐々木悠里＝人文学類3年、8面に関連記事）

新技は、宮地選手が得意とするH難度の「ブレットシュナイダー」（コバチ2回ひねり）」の応用技。「ブレットシュナイダー」は昨年11月の世界選手権でドイツのアンドレアス・ブレットシュナイダー選手が初めて成功させた。この技は、回転の勢いを生かして鉄棒の上方で手を離し、足を曲げた状態で2回縦に回りながら、「ひねり」と呼ばれる360度の横回転を2回加えるもの。

これに対し、新技は、「ブレットシュナイダー」である程度屈曲させる足を真っすぐ伸ばした状態で行う。そのため、従来より高く飛ぶ必要があるうえ、空中でバランスを取りにくく、難易度が跳ね上がる。

宮地選手はこの新技を今年の6月の全日本種目別選手権ですでに成功させていたが、国際体操連盟が定める大会ではなかったため新技だと認定されていなかった。選手名にちなんだ新たな技名は同連盟が発表する。宮地選手は「新技は自分の強みとなる。自分の名前がつくからには精度を上げていきたい」と話した。

体操競技では世界選手権などの国際大会で新技を成功させた場合、選手名にちなんだ技名となることが多く、日本人としては2013年の世界選手権で、白井健三選手が床運動と跳馬の両種目で3つの新技を成功させ、「シライ」などの技名を得たことが大きな反響を呼んでいた。

写真：YUTAKA／アフロスポーツ

新技「伸身ブレットシュナイダー」を成功させた宮地（10月9日（日本時間）、世界選手権男子鉄棒決勝で）

貸与型奨学金

「返済が不安」6割超

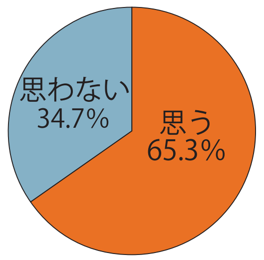
「有利子＝学生ローン」の声も

大学などの卒業後、返済が必要な「貸与型」奨学金について、その返済に追われる若者が社会問題となる中、本紙は奨学金に関する調査を筑波大学生631人に実施した。「貸与型」の受給学生150人のうち、「返済が不安」とした学生は65・3%（98人）と、そうでない学生34・7%（52人）の2倍近くに上った。毎年全国で約132万人の大学生などが、国の「貸与型」奨学金を受けるが、政府は今年度、「貸与型」に加え、政府出資の独立行政法人経由で返済不要の「給付型」奨学金を始めた。

（木村誠＝人文学類1年、秋田耕平＝社会学類2年、6、7面に関連特集）

調査は10月、学群生を中心に実施。有効回答のうち、奨学金利用者は27・2%（170人）、非利用者は72・8%（456人）だった。貸与型利用者の中で返済を「不安に思う」学生は65・3%（98人）だったが、その理由を複数回答で聞くと、「（将来）安定した収入を得られる分からないから」が53・1%（52人）と最多。次に「奨学金の額が大きい」が43・9%（43人）、「奨学金の返済は大変だという話を聞いた」が31・6%（31人）と続き、返済を不安に思う学生の存在が浮き彫りとなった。このほか、「有利子の奨学金は実質的に学生ローンと同じではないか」との声もあった。

現時点で貸与型奨学金を返せるか不安に思うか



一方、「不安に思っていない」学生は34・7%（52人）で、その69・2%（36人）が「きちんと就職し働けば（返済は）問題ない」を理由に選んだ。

また、今年度から国が始めた「給付型」奨学金は、保護者の所得や成績などの選定基準があるが、その賛否を尋ねたところ、有効回答数のうち、「賛成」が80・4%（492人）と、「反対」6・7%（41人）、「分からない」12・9%（79人）を大きく上回った。賛成の理由として、「経済的に苦しくても大学進学が可能」が69・5%（342人）と最も多く、次いで「返済が不要」が23・8%（117人）、「国の公的な奨学金で安心」が2・8%（14人）と続いた。一方、反対の理由としては「親の所得で給付の可否が左右されるのは不公平」が36・6%（15人）、「国の財政が不安」が24・4%（10人）、「税金を一部の人に使うことは不公平」が17・1%（7人）いた。

更に、今後どのような奨学金を望むか尋ねると、「返済不要の給付型」が50・3%（300人）と半数以上で、次いで「無利子」が25・1%（150人）、「自分の所得に応じて毎月の返済額を決めることが可能なもの」が10・6%（63人）、「保護者の所得制限が緩い奨学金」が8・2%（49人）、「月々の返済額が少ないもの」が4%（24人）と続いた。

筑波おろし

漫画が好きで、国内外の作品を問わず年に1000冊は読む。中でも「バンド・デシネ」と総称されるフランス語圏の漫画を読んだときの衝撃は今でも、忘れられない。それはまさに芸術だった▼ジャンルこそ冒険ものやミステリー、SFなどだが、日本の漫画とはまるで違う。単行本はA4のハードカバー。基本的に高額で2000円を超えるものが多い。大半の漫画家は助手に頼らず、絵画のように繊細な絵を描き上げる▼例えば「ムチャチョ／ある少年の革命」。1970年代の中米を舞台に、若い修道士が独裁打倒を目指し、革命に身を投じる。デッサンを思わせるような写実的な絵と、1コマずつの描き込みの見事さ。台詞は少なく、まさに絵で語る。ページをめくるごとに作者の世界観に引き込まれた▼漫画やアニメ、和食や「もったいない」の精神など、さまざまな日本文化が「クールジャパン」の名で海外に発信されている。昨年のリオ五輪閉会式では、人気漫画「キャプテン翼」を活用した日本のアニメーションが大きく注目を集めた▼日本の漫画は世界に誇る文化だと思う。だが「バンド・デシネ」との出会いで、豊かな漫画文化が、世界中にあることに気付いた。日本の漫画だけ読んでいては「もったいない」、とも。何らかの形で漫画業界に身を投じたいとの夢がある。明日はどんな漫画に出会えるのだろうか。

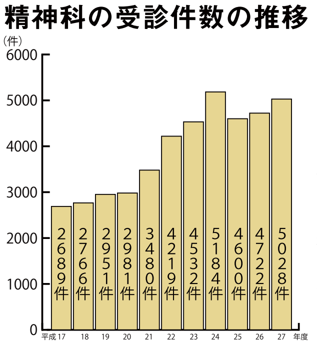
注目記事
精神科 受診者約2倍に 2
絶対音感 むくどり 5
女子バド 団体4連覇 9
男子剣道 全国制覇 9
学生の放置自転車使用 10
留学生の入居進まず 11
ミニ特集 3
ぶらつくば〜アート編〜

病院アートを語る齊藤名誉教授

特集 6,7
「給付型」開始
今考える奨学金問題

保健管理センターの精神科
受診者10年で約2倍に

診療サービスの有料化を検討中の筑波大学保健管理センターで、精神科の受診件数が27年度に5028件と、10年前（2689件）の約2倍に増えていることが同センターへの取材で分かった。太刀川弘和所長（医学医療系・准教授）は「筑波大生は真面目で精神的圧力に弱い」と分析する一方、受診学生には恋愛の悩みなど精神科医の対応が不必要な例も多いと指摘。同センターには臨床心理士の学生相談（無料）があり、「恋愛や学業などの悩みは学生相談を利用してほしい」と話している。同センターの運営経費は年間約1000万円不足する事態が常態化し、打開策として精神科を含む診療サービスの有料化を検討している。（秋田耕平）



太刀川所長によると精神科の受診学生は憂鬱な気分や不眠、不安、やる気が出ないなどの症状を訴える場合が多く、特に1、4年生が多い。原因として、1年生は学業不振や対人関係、4年生は就職活動などのストレスが多いという。

また太刀川所長は精神科の受診件数の増加原因を「社会的に若者の精神状態が悪化している」と分析。現代社会は「若者は模範的であるべき」という風潮が強く、精神的な圧力がかかりやすい一方で、「悩むことを良しとしない」風潮も精神状態の悪化に拍車をかけていると指摘した。

精神科の受診学生は、本人がストレスを感じる作業ができなくなる「適応障がい」や、何かをやる気力がなくなる「うつ病」と診断される場合が多い。また、思考や感情の制御が難しくなる「統合失調症」など専門的な治療が必要な学生もいる。

同センターで検討中の診療サービス有料化では、精神科も有料化の対象だが、学生相談室は無料だ。現在、精神科を選ぶ学生が多いが、太刀川所長は「悩みの背景に心の病気があると考え、学生相談室への相談で十分な症状でも精神科を受診する学生が多いのではないか」と指摘。だが「精神科は精神的な問題で生活に支障が出ている場合に受診し、恋愛や学業など心の悩みは精神科に隣接する臨床心理士の学生相談を利用してほしい」と呼びかけている。一方、太刀川所長は「早めの受診で精神障がいを予防することができる。心身の不調を感じたら、気軽に相談してほしい」と語った。

太刀川所長は精神科診療の有料化について「（受診件数が増え）精神科も薬剤費などがかさんでいる。適応障がいやうつ病など治療が必要な人への医療水準を維持するために必要だ」と話し、同センターの運営状況に理解を求めた。

同センターは年間の運営経費が10年前の約6割となり、年間約1000万円の不足が常態化。診療サービスの有料化や業務内容の見直しを進めている。

互いを知り多様性考える
障がい者スポーツ体験も

障がいの有無や国籍、性別などの多様性について考えるイベント「ダイバーシティ Awareness Week 2017」が、10月2―6日に、石の広場などで開催され、展示や講演会など、5日間で13の企画が行われた。

3日には石の広場で、アダプテッド・スポーツと呼ばれる障がい者や高齢者なども参加できるスポーツの体験会が行われた。来場者らは競技の説明を受けた後、車椅子を使ったポートボールを体験した。

日常的に車椅子を使用しているという参加者は「競技用の車椅子には初めて乗ったが、普通の車椅子とタイヤの形も違い、軽くて移動しやすかった。仲間と声を掛け合って競技を楽しめた」と話した。

競技を楽しむ参加者ら（10月3日、石の広場で）

また5日には、第三エリアで写真家レスリー・キーさんの展示会が行われた。展示されたのはLGBTなど性的少数者の顔写真。この展示会は性的少数者の認知を広めることを目的とした、認定NPO法人グッド・エイジング・エールズの企画「OUT IN JAPAN」の一環。写真と同時に、性自認や性的指向などを公開しようと思ったきっかけなどが展示された。

ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター長の五十嵐浩也教授（芸術系）は「障がいの研究が盛んな筑波大学ならではの取り組みになった」と話した。（越智小夏＝比較文化学類2年、写真も）

TCC事前説明会
森川さん講演も

筑波大学から起業家の輩出を目的とした学群自由科目・大学院共通科目「筑波クリエイティブ・キャンプ・アドバンスト（TCCアドバンスト）」の事前説明会が10月4日に共同利用棟Aで開かれた。説明会の後には、LINEなど多くの事業を立ち上げ、現在は女性向けの情報を数十秒の動画で配信するサービスを展開するC channel代表取締役社長の森川亮さん（昭和63年度情報学類卒）による講演会も行われた。

同授業は、平成28年度から開講。受講者は起業の仕方や経営方針の立て方などを学び、最終的に顧客層や企業規模など起業計画を立てる。12月20日には東京キャンパスで発表会が行われ、森川さんを含む実業家数名が「独創性」や「実現可能性」などの観点で評価。最優秀賞に選ばれた受講者は起業家や投資家などの支援を受けながら起業を目指す。過去には木村友輔さん（体専3年）がインターネットを通してサッカートレーニングを共有するサービス、「シェアトレ」を起業している。

事前説明会では産学連携企画課の中川磨（おさむ）さんによる授業内容などの説明後に、森川さんが起業の仕方などに関する講演会を行った。森川さんは「これからの時代、若いうちから自立していかなければならない」と語っていた。

また中川さんは「森川さん以外にも筑波大は多くの起業家を輩出している。その人たちに続く学生が育つ環境を今後も整備したい」と話した。（南圭＝教育学類1年、12面に関連写真）

計算科学研究センター
記念シンポ開催

筑波大学計算科学研究センターは発足25周年を記念して10月10―11日、シンポジウム『「学際計算科学による新たな知の発見・統合・創出」―計算科学の発展と将来―』をつくば国際会議場（つくば市竹園）で開催した。

シンポジウムでは、物理学や地球科学などの研究者らが現在行う研究について講演を行った。

今回のシンポジウムについて同センター長の梅村雅之教授は、「これからも計算機開発の先導的役割を担い、技術開拓を進めていきたい」と語った。（豊岡恵＝比較文化学類1年）

理事長インタビュー

「常陽新聞」新たな門出
「NEWSつくば」ウェブで発信

茨城県つくば、土浦両市を主対象に発行されてきた「常陽新聞」が大きな転機を迎えている。1948年創刊の同紙は、2013年に経営不振で廃刊。14年にタブロイド判発行で再起を期したが、発行部数が伸び悩み17年3月末に休刊した。現在同紙は、元記者らが8月にNPO法人「NEWSつくば」を設立、活動拠点を筑波学院大学（つくば市吾妻）に置き、ネットで両市のニュースを発信している。法人設立の経緯や地域紙の役割などを同法人理事長の坂本栄さんに聞いた。

（前名裕一＝社会学類3年、佐々木悠里）

―「NEWSつくば」を立ち上げた経緯は。

3月の常陽新聞の休刊後、読者から地域ニュースが読めないとの声がいくつも届き、地域密着型のメディアの必要性を感じた。だが（紙の）新聞の復刊は、印刷などの費用で困難。そんな中、常陽新聞時代に協力関係にあった筑波学院大から一室を借りることができ、元記者たちの協力もありネットニュース配信機関を立ち上げた。

坂本さん（10月19日、筑波学院大で）＝佐々木悠里撮影

「地域のメディア」目指す

―活動内容は。

週1回の編集会議でニュースの扱いを話し合う。大手紙が取り上げないつくば、土浦市の行政問題や事件、イベントなどを中心に1日4回ほど発信する。ラヂオつくば（つくば市吾妻）と協力した地域ニュースや、筑波学院大でのジャーナリズムなどの公開講座も検討している。

―今後取り上げたい地域の課題などは。

つくば市は昨年11月に五十嵐市長が就任したが、市長は白紙撤回となった総合運動公園（予定地・つくば市大穂）の建設事業の「検証」など未だ公約の多くは達成されていない。土浦市では、11月27日に土浦市立図書館が土浦駅前に移転するが、新図書館の蔵書の収容能力は県内有数。館内の交流の場も充実しており、（この移転を）大きく取り上げたい。

つくば市は人口増で小中学校が不足する一方、土浦市では人口減が進んでおり、これらの問題への行政の対応も追いかけたい。

―地域ニュースの媒体の義務は。

メディアには行政監視の役割がある。プロ記者の実力を生かし、大手紙が監視しきれない空白を、ネットニュースという形で埋めたい。米国では多くの地方紙が廃刊に追い込まれており、日本でも同様の事態は十分想定される。地方メディアの新しい形として「NEWSつくば」がモデルとなればと思う。

◆

坂本栄（さかもと・さかえ）

1946年土浦市生まれ。時事通信社元ワシントン支局長。

記者の目

地域メディアの役割は大きいと思う。米・カリフォルニア州に人口約3・5万人のベルという町がある。町では経営不振から1988年、地元紙が廃刊になっていたが、その後、とんでもない問題が増殖した。市幹部らは徐々に自らの給与を増やし、十数年後には例えば市トップが過去の12倍、約8000万円の年棒を得ていたのだ。

時の米大統領の約二倍の年棒だった。問題はたまたま町を訪れた大手紙記者によって明るみに出されるが、朝日新聞（2011年10月29日朝刊「記者が消えた街」）はこの問題に触れ、地域行政を監視すべき地元紙の欠如が問題を招いた、と指摘している。

「NEWSつくば」の坂本栄さんは、地域メディアの存在が行政の不正への抑止力になる、と力説した。筑波大学周辺でも配布される本紙は過去、大学周辺の暗い道でのわいせつ事件の多発を機にキャンペーンを行い、それがつくば市の街灯増設や、問題を話し合う市の協議会設立に結びついた。地域メディアは大手メディアの「空白」を埋める。「NEWSつくば」に期待したい。（佐々木悠里）

広告欄

ぶらつくば ～アート編～

国公立の総合大学では珍しく、芸術専門の学群を持つ筑波大学。その影響か、学内には芸術専門の学生・教員が建造や制作に関わった建物や像が多い。これらの作品の背景は?。環境デザインが専門の渡和由准教授（芸術系）と、アートセラピーが専門の齊藤泰嘉名誉教授（芸術系）、陶芸が専門の齋藤敏寿准教授（芸術系）と共に大学を「ぶら歩き」し、「筑波大芸術談義」に花を咲かせた。（佐々木悠里、建内亮太＝人文学類、池田花於里、越智小夏＝比較文化学類、中村瑞歩＝日本語・日本文化学類、岡田優太＝社会学類）

芸術が患者の癒しに

5つのアートスポット

筑波大には、大きく分けて5つのアートスポットがある。①医学エリア②国際統合睡眠医科学研究機構（IIIS）棟③平砂学生宿舎④体育・芸術エリア⑤一の矢学生宿舎……だ。順番に歩いた。

①医学エリア

医学エリアは駅に近く人通りも多い。近隣の幼稚園の散歩コースにもなっており、訪れた時も子どもたちや病院に通う人が多くみられた。食堂の前には小さな広場がある。齊藤名誉教授らが2014年に学生らと作ったもので、芸術のセラピー効果を利用し、患者や病院関係者の癒しになることを目的とした。芝生の広場で目を引くのは、ひざ下の高さの淡いピンク色の豚の置物。作者は実家が養豚業を営み、豚をモチーフにした作品を多く作る小野裕子助教（芸術系）だ。

齊藤名誉教授は、「昔の医学エリアは閉鎖的な面もあったが、芸術空間も作ると明るく開放的になった。医学と芸術両方の専門学部がある国立大学は筑波大だけ。芸術の学生には実践の場になるし、いい影響を与えている」と誇らしげに話す。病院を利用するある学生は「熱を出していた時に、庭の豚の穏やかな表情を見て癒された」と話していた。

②IIIS棟

医学エリアから西に歩いて10分。国際統合睡眠医科学研究機構（IIIS）棟があった。完成は15年。9階建ての建物は柳沢正史機構長らの提案で、芸術作品の展示を前提に建てられた。建物内の作品は全て、柳沢機構長らが研究する「睡眠」がテーマ。齋藤准教授は「設計段階からアート作品を組み込む機会はなかなかなく、案を出して皆で完成させた」と、懐かしそうに当時を振り返る。

同棟の中心部は4階まで吹き抜け。2階以上の壁は全てガラス張りで、開放的な空間になっている。1階は談話室で、縦約4m横約15mの壁全体が齋藤准教授の作品「Dorveille（睡眠と覚醒の間）」だ。

天井から吊るされた豚の奥には齋藤准教授の作品「Dorveille（睡眠と覚醒の間）」が見える（10月26日、IIIS棟で）＝越智小夏撮影

全作品「睡眠」がテーマ

黒いその壁には、三角形に組み合った陶製のパーツが191個、右から左へ広がるように設置されていた。

陶製のパーツは右から左へ銀色から徐々に黒色になり、模様もはっきりした波形から、表面がどろっと溶けたものへと変化していた。眠り初めの意識が徐々にぼんやりしていく様子を表しているようだ。作成にはIIISの事務職員や研究者らも参加したといい、齋藤准教授は「普段利用する人たちに親しみを持ってほしい」と話した。

1階の談話室。ひときわ目立つのが、天井から吹き抜けに吊るされた、人の大きさ程の母豚と子豚が寄り添って眠る作品だ。これも、医学エリアで芝生の広場に豚の置物を作った小野助教の作品。題は「すぴー…すぴー…すぴー…」。寄り添い眠る豚の親子が夢の中で空を飛んでいる風にも見える。白と黒が基調の現代的な印象の部屋の中で、明るいピンクの豚たちは、温かい雰囲気を出しつつ、不思議と空間と調和していた。

建物の前の庭は芝生や橋が整備され、小さな公園のようだ。中でも高さ3mほどの、齋藤准教授の作品「archetype 00021」に目が留まる。白や薄緑などの陶製のパーツをいくつも組み合わせ、その周りに網目状の鉄を巡らせた、不思議な作品だ。

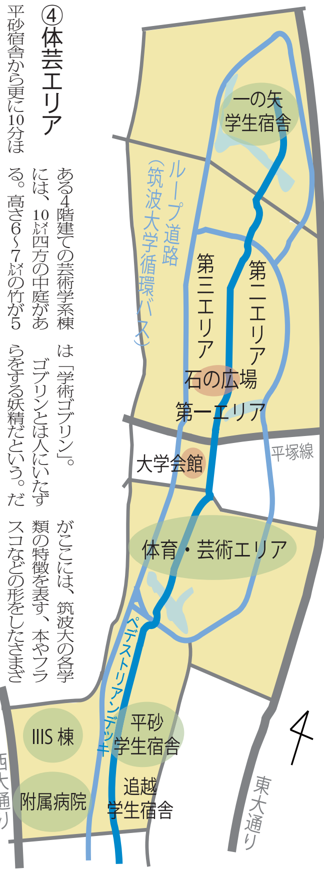
齋藤准教授は「人類にはアーキタイプ（元型）という共通のかたちがあるのではという考え方を題にしたシリーズ作品の一つ」と話す。理解が追いつかず戸惑う記者に、「どのように見えてもいいんだよ」とほほ笑んだ。更に「作品は背景の草木と調和している。もともと陶製は土からできているから自然との相性が良い」と付け加えた。

③平砂宿舎

IIIS棟から北に3分歩くと、色彩豊かな平砂学生宿舎がある。

筑波大の学生宿舎の改修棟の外観には、白を基調にオレンジ色や青色などが使われている。配色の担当は、色彩デザインが専門の山本早里准教授（芸術系）。

後日、山本准教授に聞くと、塗装は09年からの宿舎の改修工事と同時に行われているという。西欧ではよく、階ごとに違う配色を施した建物が見られる。同じような視点で配色を行うことで、多くの留学生が集まる筑波大の特徴を示した。以前の白一色の画一的な印象とは異なり、建物を見た人が元気になることも目的にしたという。山本准教授は「（平砂学生宿舎は）周囲に目立つ建物もないため、色が目立ち配色の効果が学生に伝わりやすい」と話した。



④体芸エリア

平砂宿舎から更に10分ほど北に歩くと、体育・芸術エリアに着く。

渡准教授によると、同エリアには、細部にも「こだわり」がある。例えば、5C棟や体芸食堂の前には、白いタイルが地面に敷かれている。以前は駐輪マナーの悪さが目立っていたが、タイルを敷いて彫刻などを置くと、駐輪が自然と無くなったという。渡准教授は「駐輪禁止の張り紙を貼るより、おしゃれでスマート」と芸術家の目で笑った。

また、5C棟のすぐ西にある4階建ての芸術学系棟には、10m四方の中庭がある。高さ6～7mの竹が5本植えられており、その横にも彫刻があった。同棟1、2階は壁全体が窓。中庭が一望出来た。「窓から見える景色を芸術作品のように演出する『借景効果』を利用している」と渡准教授は得意げに語った。

⑤一の矢宿舎

体育・芸術エリアから北に歩いて20分。森に囲まれた一の矢学生宿舎の留学生棟に入ると、中庭の壁に描かれたキャラクターが目に飛び込んできた。壁画の題は「学術ゴブリン」。

ゴブリンとは人にいたずらをする妖精だという。だがここには、筑波大の各学類の特徴を表す、本やフラスコなどの形をしたさまざまなゴブリンが柔らかい色合いで描かれている。

ゴブリンで学類の特徴

壁画のゴブリンを解説する小中さん（10月14日、一の矢学生宿舎で）＝池田花於里撮影

壁画を描いたのは、筑波大の附属病院や学校などでゴブリンを題材にした作品を制作する「ゴブリン博士」こと小中大地さん（人間総合2年）。後日、小中さんに取材すると「窓の外から眺めたり、実際に中庭に出るなど楽しんでほしい」と作品の狙いを語った。

こぼれ話

学内の他の芸術作品にも話が弾んだ。

■パネル

筑波大をぐるっと囲むループ道路。どんぐりや紅葉の写真が印刷された、高さ2mほどのパネルが随所に設置されている。かつて大学が運行していた学内連絡バスの停留所にあった時刻表を、渡准教授がADPという授業を通して再利用し、作品にした。渡准教授は「写真は、パネルの設置場所の近くで見つけた植物を撮影した」と話す。

パネルを指差す渡准教授（10月11日、筑波大学西のバス停で）＝越智小夏撮影

■彫刻

学内には、教員や学生が作成した彫刻が各所に32個あり、少しずつ増えている。大半が02年の学内の設備を見直す「キャンパスリニューアル」で設置された。

像など目立つ作品は、人通りの多いペデストリアンデッキ沿いや大学入り口にある。当初の計画では、各エリアの宿舎にも彫刻などの設置が計画されたが、予算の関係などで設置は見送られた。

設置の方法にも工夫がある。「作品は皆、人の目に入りやすいように設置された」と渡准教授。

例えば、体育・芸術エリアから大学会館に続く道沿いにある、木の葉をモチーフにした木彫「昇華」。親しみやすさを出すため、人の目線より少し低い位置に置かれている。対照的なのは大学会館前の銅像「嘉納治五郎先生之像」。「東洋のロダン」と呼ばれた彫刻家・朝倉文夫氏の制作で、3mほどの高さを持たせ、筑波大の象徴として目立つように設置された。

彫刻を「ぶらつくば」（10月6日、石の広場で）＝越智小夏撮影

大学中央の「石の広場」。高さ3mほどの像が目に留まる。文化勲章を受賞した彫刻家、中村晋也氏が制作した「MiserereX Ⅶ 1999グレゴリオ聖歌：Hymm：Ave maris stellaより賛歌：幸あれ、海の星」だ。

長い名前の銅像は、女性が立ち上がり目を閉じ、空に向かい両手を大きく広げている。神に祈りを捧げるキリスト教の象徴的なポーズといい、齊藤名誉教授は「普通、像は広場の中心にあることが多いが、この像は広場の端にある。この位置が一番、広場を一望でき、空の広がりを表している」と話す。

ぶら歩きをした日の天気は晴天。記者が像と同じポーズをとると、目の前に開けた広場と青空が広がり、開放的な気持ちになった。齊藤名誉教授は「彫刻を鑑賞する時は、作品と同じポーズをとると、より理解できる」とほほ笑んだ。

多様な筑波大の「生態」。それを思う芸術家教員の顔がそこにあった。

記者の声

大学生と政治

筑波大生の投票行動分析
維新支持 政策を重視か
衆院選出口調査

石川泰行

本紙は10月22日投開票の衆院選・茨城6区で筑波大学生150人を対象に出口調査を実施した。この結果、自民党候補と自民党に投票した学生が、小選挙区で約7割、比例代表で6割と、いずれも小選挙区、比例代表北関東ブロックの得票率を大きく上回った。筑波大生の自民党支持が明らかになったが、調査で興味深かったのはこれだけではない。比例代表で日本維新の会（維新）に投票した学生が9・3％と、同ブロックの得票率3・4％を大きく上回ったのだ。維新の教育・子育てを重視する姿勢が評価されたことや、希望の党（希望）への不信感が理由と考えられる。

今回の出口調査では、小選挙区、比例代表それぞれの投票先と選んだ理由、支持政党、重視した政策を調査した。この結果、比例代表の投票先を選んだ理由では、「支持政党だから」と回答した学生が40％と最多。また、重視した政策では「景気・雇用対策」が45・3％で、次いで「外交・安全保障」（28％）となっていた。

だが、維新に投票した学生は違った。78・6％が「政策を支持」の理由で投票。重視した政策では、「景気・雇用対策」（50％）が最多だったが、次は「教育・子育て」（33・3％）だった。維新の場合はその政策が学生に支持されたことが分かる。

衆院選で維新は「身を切る改革で教育無償化」を掲げて選挙運動を展開。更に、大阪で議員定数の大幅削減や市営バスの経営改革で、平成20年度決算では10年ぶりに府財政の収支黒字化を達成した。

また、高校授業料の無償化にも取り組んでいる。「教育・子育て」の政策を重視し、実行する姿勢が学生たちの支持を集めたのではないか。

筑波大生が維新を支持する理由はほかにも考えられる。150人の中には、「支持的に希望、維新寄りだが、希望にあまり良い思いを持っていない」と回答し、維新に投票した学生がいた。

今回の衆院選直前、小池百合子都知事が希望を立ち上げ、直後に民進党の前原誠司代表（当時）が同党の希望への合流を発表。だが、小池代表の「排除」発言で、民進党議員が希望と立憲民主党に分かれた。また、安全保障法制に対して激しく反対していた議員が希望の公認を受けるため、主張を変えてしまうような、当選目的の議員の存在が批判された。

一連の騒動で、希望は失速。議席を減らした。これを見た学生の中には、政策的に最も近い維新に投票せざるを得ない、と考えた人もいたのではないか。

だが、今回の出口調査の対象となったのは、筑波大生全体の一部であることも事実だ。今後も筑波大生の政治への考え方を調査していきたい。

（社会学類3年）

筑波時評

被疑者の人生に深刻な影響
供述を含めた証拠の吟味を
痴漢冤罪問題

最近、痴漢を疑われた人が線路内に立ち入り逃走した事件が話題です。仮に身に覚えがなくても、線路内への立ち入り行為は、鉄道営業法違反や刑法125条1項の往来危険罪等に該当し得るほか、死亡事故にもつながる大変危険な行為です。

痴漢の正式な罪名は、行為態様（下着の中に手を入れたかなど）によって異なりますが、迷惑防止条例違反または刑法176条の強制わいせつ罪があります。前者は、茨城県では「6月以下の懲役又は50万円以下の罰金に処する」（都道府県によって異なる）とされ、後者の法定刑はより重く、「6月以上10年以下の懲役」とされています。誤って有罪とされれば、たとえ執行猶予となっても、その後の生活に深刻な影響を与えます。実際に死亡事故が起きているにも関わらず逃走する人がいる理由は、これを恐れ、「痴漢を疑われたらすぐに立ち去ったほうがよい」という話を無闇に信じた結果かもしれません。

では、なぜこのようなことが言われるのでしょうか。日本の刑事訴訟法は、警察官ではない私人にも現行犯逮捕を認めており（212条1項）、その場合には、被逮捕者をすぐに捜査機関に引き渡さなければなりません。その後、警察署などでの身柄拘束が引き続き行われる可能性があります。その中で、早く解放されたくてやったと言ってしまう人もいます。否認し続けたとしても、それを客観的に示すことは困難です。痴漢が疑われるのは満員電車の中が大半で、目撃者が少なく、被害者の供述に頼らざるを得なくなりますが、被害者に悪気はなくても、ぎゅうぎゅう詰めの電車内で、実際には人が触れていないのに痴漢だと勘違いすることや、人違いをすることが絶対にないわけではありません。このような事情で、仮に裁判になれば、「この人が痴漢です」という被害者の供述を否定することは大変難しく、誤って有罪となることがあるのです。

以上のような特殊性を鑑みて、慎重な捜査はもちろんのこと、裁判では、被害者の供述を含めた証拠の慎重な吟味が求められます。そして、より重要なのが、痴漢行為の予防です。例えば、諸外国のように電車内に監視カメラを設置することや、鉄道会社による満員電車解消の工夫、時差通勤やフレックスタイム制の推奨などが方法として考えられますが、一方で、プライバシーや、安全性確保、費用、企業の業務や個人の働き方への影響等も考慮しなければなりません。社会全体での取り組みが求められる課題といえるでしょう。

守田 智保子 助教（刑事訴訟法）

人文社会系・助教。明治大学大学院法学研究科博士後期課程退学。明治大学法学部専任助手を経て、2011年より現職。

反射鏡

筑波大学生と衆院選

10月22日に行われた衆議院選挙。今回の選挙では解散自体への疑問の声や野党の再編が大きく話題になった。一方、若者の政治離れも叫ばれる。筑波大学生は今回の選挙の投票に行ったのか、また政治に関する情報はどのように収集しているのか。春日エリアや第二、第三エリア前で聞いた。（鈴木瑞穂＝人文学類2年、建内亮太＝同1年、竹添そら＝知識情報・図書館学類1年）

【人文3年・男性】
住民票をつくばに移しておらず、つくばで投票するのは手続きが複雑で手間がかかるため、投票に行けなかった。選挙に関する情報は主にツイッターで得ていた。

【知識図書1年・女性】
何か信念があるというよりは、投票に行ったかを問われたときに胸を張って「私は行った」と言いたかったため、投票へ行った。選挙に関する情報はインターネットなどで各政党が掲げている公約を調べ、自分なりに共感できる候補者に一票を投じた。

【修教1年・男性】
特に深い考えはなく投票は当たり前のことだと思い、選挙へ行った。ネットニュースで政党や候補者などに関する情報には目を通していた。

【地球2年・男性】
政治に関わりたいと思い、投票に行った。選挙に関する情報はネットで調べた。

【構エネ1年・男性】
行きたかったが、住民票をつくばに移していなかったので投票できなかった。ネットニュースなどで選挙に関する情報は集めていた。

【知識図書1年・女性】
与えられた権利は行使しようと思い、行った。はじめは各政党のホームページを参考にしようと考えていたが、難しく、手間もかかるので比較サイトやまとめサイトなどを参考にして、誰に投票するか決めた。

【知識図書1年・女性】
住民票が出身地にあり、投票に行けなかった。選挙が終わった後に、不在者投票の制度を友人から聞いて知った。選挙前からこの制度を知っていれば行っていたと思う。

【メ創1年・女性】
選挙当日に部活動の合宿があり行けなかった。投票に行かないと決めてしまうと、選挙に対する興味もなくなり、情報を集めなかった。

【知識図書1年・男性】
住民票が出身地にあり、投票に行けなかった。不在者投票の制度は知っていたが、手順が面倒でやらなかった。手軽に投票できる制度があれば、また大学内への投票所設置が再開されれば大学生の投票率も上がるのではないか。

【情科1年・男性】
選挙日当日が引っ越しと重なり行けなかった。期日前投票も考えたが面倒でやめた。若者の投票率を上げようと考えるならウェブ投票を行うべきだと思うが、個人情報の保護についてなど解決すべき問題点もまだ多いように思える。

【人文2年・女性】
選挙当日につくばに住民票を移していなかったことに気づき、投票所まで行ったができなかった。選挙に関する情報はネットニュースのほか、購読している新聞や授業での先生の話などで集めた。

平砂商業施設に期待すること

筑波大学が平砂学生宿舎（つくば市天久保）の北側に商業施設を建設する計画で、スーパーマーケットの「カスミ」（本社・つくば市西大橋）と、喫茶店の「サザコーヒー」（本社・茨城県ひたちなか市）の2社が入店する見通しとなった。平砂地区付近の買い物などが便利になるが、筑波大生は新しく建設される商業施設にどのようなお店や機能を求めているのだろうか。中央図書館や石の広場付近で聞いた。（中村瑞歩＝日本語・日本文化学類1年、石川泰行＝社会学類3年、森賀遼太＝同1年）

【社学1年・男性】
平砂学生宿舎周辺にスーパーマーケットがないので不便。食品を安く売るお店が欲しい。

【生資2年・女性】
寿司や焼き肉が食べられるお店があればいいと思う。大学の周辺にはそういったお店は数が少ないので通うと思う。

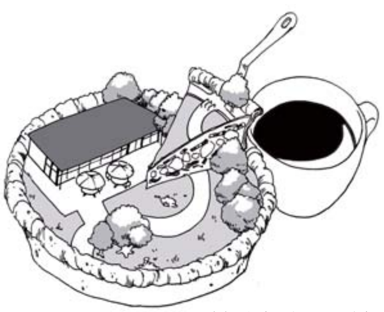
【社学1年・男性】
空き時間があるときに一息つける場所が欲しい。また、スポーツの試合を大画面で鑑賞できる施設もあればいいと思う。

【医療2年・女性】
大学の近くに薬局がないので薬局が欲しい。医薬品がすぐ手に入るようになると便利だと思う。

【日日1年・男性】
平砂学生宿舎に住んでいると、スーパーマーケットが遠いのでありがたい。特に食を重視した店が欲しい。

【心理1年・女性】
生活必需品が安く手に入るとうれしいのでディスカウントストアのような安い値段で、生活用品を安く売るお店が欲しい。

【社学3年・男性】
パンが好きなのでパン屋を設置してほしい。また、スーパーのレジは混雑すると会計までに時間がかかるので待ち時間を短くする工夫をしてほしい。


イラスト＝長手彩夏（地球学類4年）

【メ創2年・男性】
平砂宿舎周辺に本屋がないので、書店があったら便利だと思う。もしもできたら、通いたいと思っている。

【生資3年・男性】
建設されることを知らなかった。建設される商業施設が家から遠いので珍しい輸入食品をおいてくれれば行くかもしれない。

【エシス1年・男性】
天久保3丁目に住んでいるので近くにスーパーマーケットができるのはうれしい。スーパーのほかにも、気軽に食べられるファストフード店などができるとうれしい。

【社学2年・男性】
部活が深夜まで活動することが多く、夕食を買う店が近所になく、食料品店は24時間営業にしてほしい。

管弦楽団 プロ招き充実の演奏会

独奏とオケの息合った好演で魅せる

公演前、入念に演奏練習を行う指揮の田中氏と団員ら(10月28日、ノバホールで)

管弦楽団の第82回定期演奏会が10月28日にノバホール(つくば市吾妻)で行われた。指揮者に国内外のオーケストラで活躍する田中一嘉氏、ピアノ独奏にプロの戸室玄氏を招き、会場には約800人が訪れた。

3曲編成の演奏会はJ・ブラームス作「大学祝典序曲 ハ短調 作品80」で始まった。ドイツの学生歌をもとにしたメドレーのような楽曲。理性的な曲調と、若々しさあふれる団員らの演奏で観客を圧倒した。

続く「ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 作品18」は作者S・V・ラフマニノフの代表曲で、ドラマや映画でも多く使用されている。物悲し気な戸室氏の独奏で始まり、やがて管楽器と弦楽器が加わって華やかで情緒のある演奏を紡いだ。

戸室氏が「団員らがよく曲趣を理解しており、安心して演奏できた」と話したように、独奏とオーケストラの息の合った好演に観客らは大きな拍手を送った。

3曲目はL・v・ベートーヴェン作「交響曲 第2番 ニ長調 作品36」。「ダダーン」いう力強い演奏に始まる第1楽章を経て、クラリネットとヴァイオリンを中心にした甘美なリズムが第2楽章を彩った。第3楽章は低音と高音を各所に配置する躍動感のある構成。第4楽章はそのリズムを受けて情熱的に展開する。団員らは田中氏の指揮のもと、迫力ある演奏を聞かせた。

アンコールは定番のL・v・ベートーヴェン作「トルコ行進曲」。同曲はピアノ用に編曲されたメロディーが有名だが、演奏会では打楽器やトランペットが中心となった軽快な音色で、華やかに締めくくった。

公演後、団長の井上桃伽(エシス3年)さんは、「これで引退だが、今後も音楽の楽しさを観客と共有する楽団を目指してほしい」と語った。(中村瑞歩、写真も)

「私たちが作りました」

落研 寄席と大喜利で盛況

筑波大学落語研究会の落語会「この寄席は私たちが作りました」が10月9日、デイズタウンつくば(つくば市竹園)のイベントホールで開かれた。会場には筑波大生だけでなく、お年寄りや子供連れなど20名以上が来場し、観客は落語の世界を堪能した。

珍々亭仕手治(ちんちんていしてはる)こと荻野壮さん(心理2年)は落語「死神」を披露。金に困った男が死神に出会い金持ちになるが、欲に目がくらみ最後には死んでしまうという定番の演目だ。今話題の森友学園を話に織り込むなどの工夫で観客の笑いを誘った。その後の大喜利では、観客からのお題に対する答えをその場で考える謎かけや歌詠みが行われ、観客と演者が一体となり会場は大いに盛り上がった。

訪れた学生は「それぞれの人物像を想像させるように1人で何人も演じ分ける話し方に驚いた」と話した。

会長の池上雄紀さん(生資3年)は「予想より多くの人に来てもらえて、楽しい落語会だった」と語った。

同会は、つくば市の魅力を再発見し広めようと、10月1日から12月31日にかけて開催中の「つくばスタイル縁日2017」の一環。11月23日にも、同会場で第2回落語会が行われる。

(南圭、12面に関連写真)

受講生が16演目を披露

350人を芸術の世界に誘う

10月27日、國安孝昌教授(芸術系)らが受け持つ芸術専門学群の授業の一環として、受講生らのパフォーマンスが6A棟脇の特設会場で行われた。9人の受講生が演者となり身体による表現を行い、訪れた観客350人を芸術の世界に誘った。

午後7時、会場に集まった観客を取り囲むようにして虚ろな目をした演者らが現れ、16演目を披露した。観客とステージの場所を明確に分けず、観客の間で演じたり、無作為に選ばれた観客がシャボン玉を飛ばすなど、観客を巻き込んだパフォーマンスも行われた。

後半の演目「未だ夜明けには程遠い」では、1人の女子学生が卒業アルバムらしき冊子を持って現れる。内容を朗読した後、女子学生は唐突にそれを破り捨て、紙片をバケツに集め、燃やした火でマシュマロを炙って食べた。荒々しく破り捨てた後に粛々と食べる女子学生の対照的な姿を観客は固唾を呑んで見守った。火はその後、それぞれの演者が持ったろうそくに移され、最後に全員がその火を吹き消した。

國安教授は「当日まで天候に恵まれず、思うように練習ができなかった中、学生の『若さ』によって想像以上の出来となった」と驚きを隠し得なかった。また「芸術は言葉を越えたものを表現すること。観客が何かを感じ取ってくれれば、それが成功だ」と話した。

会場を訪れた女子学生は「自分が普段目を背けていることを突きつけられたようで、激しく心を揺さぶられた」と話した。(鈴木瑞穂=人文学類2年、写真も)

ろうそくを持つ女子学生(10月27日、6A棟脇の特設会場で)

◆おことわり

「ぶらり俳句筑波大」は休みます。

催事

DC展

11月14日(火)—19日(日)にDC展が茨城県つくば美術館(つくば市吾妻)で開催される。

DC展は筑波大学大学院の人間総合科学研究科の博士後期課程で芸術を専攻する学生らが制作した洋画・版画・日本画・彫塑・書・芸術支援の作品を展示する。

開催時間は午前9時30分から午後5時までで、最終日は午後3時で閉館。入場は無料。

問い合わせ=TEL:070—3266—0151

e-mail:13thdcten@gmail.com

絶対音感

M.A

秋の麦畑に思いを馳せる

歌を聞いて、ある風景を言葉の真の意味で明確に「追体験」する……。生まれて初めての感覚だった。10月13日につくばカピオ(つくば市竹園)で開かれた、合唱団むくどりの第37回定期コンサート。テノールの歌声は、ある時は大地に麦がなびく風景を連想させ、ソプラノの歌声はある時は遠く離れた異国の厳しい寒さを思わせた。

その体験に襲われたのは中島みゆき作「麦の唄」を聞いた時だった。

2014年のNHK連続テレビ小説「マッサン」の主題歌だ。初の国産ウイスキーの生産を目指す日本人主人公。その妻エリーは夫を支えるため、生まれの地スコットランドを離れて、遠い日本で暮らす決意を固める。「なつかしい人々/なつかしい風景/その総てと離れても/あなたと歩きたい」。歌は夫を支える妻の愛の象徴として、日本中に流れ続けた。

「麦は泣き/麦は咲き/明日へ育ってゆく」

コーラスのみが醸し出すことができる、力強く伸びやかな歌声。サビのこの部分を聞いた瞬間、秋空に照らされた広大な、そして黄金色の麦畑が、脳裏に明確なイマージュとなってよみがえってきた。男女混声の歌声は離れ、そして重なり、麦たちは風に揺れ始める。揺れた麦たちは時に悲しみ、時に笑う。それは人生を象徴していた。

「私たちは出会い/私たちは惑い/いつか信じる日を経て/1本の麦になる」。2番の主旋律では、男性のテノールが目立ち始める。厳しい環境に耐え、ゆっくりと成長していく1本の麦。その姿は力強く、しなやかだ。テノールの歌声にたくましい麦一本一本のイマージュが重なる。そして、ストーリーを完結させる圧巻は、実は後半の間奏だった。ピアニカが紡ぐ、郷愁あふれる音色。それは、秋風を感じさせた。様々な試練のあと、たわわに実った麦。それをなびかせる秋風だった。

美しく重なる歌声を響かせる団員たち(10月13日、つくばカピオで)=建内亮太撮影

4曲目の「O-YO-YO」はカナダ民謡を合唱用に編曲したものだが、作曲者などは不明。団長の小島久樹さん(日日3年)は「歌詞はカナダ東部のケベックなまりのフランス語。難易度が高い」と話す。ある教会で、修道士が女性3人のざんげに耳を傾ける。そんな歌詞は、短いフレーズの繰り返しだ。

だがひとたび歌われると、拍子は何度も変わった。次第に加わるタンバリン。団員らは手を叩き指を鳴らし、歌詞を歯切れよく歌う。「O-YO-YO」は現地でリズムをとるための掛け声。伸びやかながらも鋭いこのフレーズは曲中で何度も登場し、変拍子の中で鮮烈な印象を与える。歯切れ良いリズムはカナダの厳しい寒さを思い起こさせた。

(建内亮太=人文学類1年、橋野朝奈=日本語・日本文化学類3年)

私の一冊

『セーラが街にやってきた』

清野由美著(日経ビジネス人文庫)

地域を変える「不協和音」

本書は、アメリカ・ペンシルベニア育ちのセーラ・カミングスが長野県小布施(おぶせ)町にやってきて地域の再生・活性化を実現してゆく姿を描いた、実に楽しくて痛快なドキュメンタリー。改めて解説するまでもなく本の題名は、「聖者がまちにやってきた」になぞらえてつけられている。

小布施にとって彼女は「よそ者」であり、台風娘と呼ばれる「若者」であった。そうした彼女が、最近流行しているアイドルグループの歌の表現を借りれば、「不協和音で既成概念を壊せ!みんな揃って同じ意見だけではおかしいだろう。意思を貫け!ここで主張を曲げたら生きてる価値ない」(秋元康作詞「不協和音」より)というスタンスで、「ばか者」と思われてもひるまず突き進んで町を変えていった。つまり小布施にやってきた彼女は「聖者」ではなく、「不協和音」だったわけである。

ここで大切なのは、その不協和音を小布施の人々はじゃま者として排除したのではなく、再生のキーパーソンとして受け入れたことだ。もちろん最初からウェルカムだったわけではない。しかし台風娘の活躍がやがて同調者を生み、小布施に新しいさわやかな風が吹く。

この本を読んでいると、既成観念や価値観などと異なる、エネルギッシュで異質なものを寛容に受け入れて新しい風を創造してゆくことが、地域の存続・成長にとっていかに大切で貴重なことかを改めて教えられる。それとともに、彼女の目は町を変えることのみに向いているのではなく、後世に継承したい地域の背骨みたいなものをしっかり守ろうとしていることにも気づかされる。

もう一つ本書で興味深い点は、彼女が世界中をとびまわりグローバルなネットワークを作りつつ、ローカルな小布施の再生を図っていく姿である。今日、グローバルとローカルの双方に目配りの効く「グローカル志向」の人材が重要視されているが、彼女はそうした人材の好例といえよう。

筑波大学生の多くが本書の熱気に触れ、いつの日かグローカル志向の「よそ者・若者・ばか者」となって、さまざまな地域の再生に貢献してくれることを期待したい。

平沢照雄 教授(地域経済史)

人文社会系・教授。長野県出身。博士(経済学)。高知大学人文学部助教授、筑波大学大学院人文社会科学研究科教授などを経て2011年10月より現職。

今考える奨学金問題

利用者の9割弱「貸与型」

【1面続き】「将来の返済が不安だ」「奨学金は(少なくとも)無利子にすべきだ」……。本紙が筑波大学生631人に行った奨学金のアンケート調査では、返済が必要な「貸与型」奨学金に対する不安や批判が相次いだ。今年度から政府が返済不要の「給付型」奨学金を実施する一方で、「貸与型」では、多額の奨学金の返済に困る若者の存在が社会問題となっている。調査結果を分析し、奨学金の現状や問題点、今後の見通しなどを探った。(木村誠=人文学類、池田花於里、越智小夏=比較文化学類、秋田耕平=社会学類、南圭=教育学類)

調査結果

■利用者は3割弱

アンケートの結果、有効回答者のうち奨学金の利用者は27・2%(170人)、非利用者は72・8%(456人)だった。利用者のうち「貸与型」の学生が88・2%(150人)と全体の9割弱を占めた。奨学金の内訳は複数回答で、「無利子の貸与型」が47・9%(81人)、「有利子の貸与型」が45・6%(77人)だった。また、「給付型」は全体の16・6%(28人)だった。

月々の合計額は、「5万円以上10万円未満」が59・5%(100人)と約6割。「5万円未満」が31・0%(52人)、「10万円以上」が9・5%(16人)だった。

一方、奨学金を利用しない学生に理由を複数回答で聞いたところ、「お金に余裕がある」が46・8%(174人)と最も多く、次いで「将来の返済が不安だ」43・8%(163人)、「希望に合う奨学金が見つからない」10・8%(40人)だった。またその他の理由として「保護者に反対された」、「奨学金がよく分からない」などがあり、返済への不安から奨学金を借りない学生が4割を超えた。

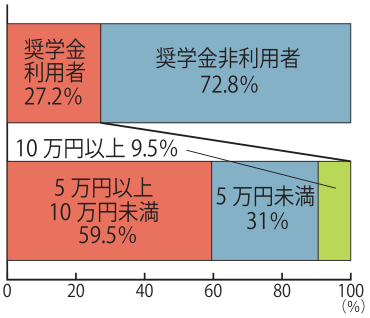
このほか、奨学金非利用の学生に将来の利用の可能性を聞いたところ、有効回答者数のうち「予定はない」が57・4%(260人)で、「予定がある」は6・0%(27人)、「分からない」は36・6%(166人)だった。

就職情報サイト「マイナビ」が8月に全国の大学生406人に行った奨学金に関する調査によると、奨学金利用者は42・9%(174人)と筑波大生の奨学金利用者27・2%の約1・6倍に上った。

■回答者の意見

アンケートでの自由意見では「国の給付型奨学金は成績で選考し、学習意欲のある学生に給付すべきだ」(エシス3年)などの提案が目立った。また、「奨学金は無利子にすべきで、有利子のものは学生ローンなどの名前に変更すべきだ」(メ創3年)との意見もあった。

奨学金利用の有無と月々の合計額



◆調査方法
10月10、11日に、総合科目の授業で奨学金に関するアンケートを実施。設問は選択回答含め12項目。計631人から回答を得た。学群別の内訳は、人文・文化116人、社会・国際40人、人間20人、生命環境63人、理工172人、情報56人、医38人、体育専門82人、芸術専門41人、大学院1人、未回答2人だった。

学生631人に調査

日本の奨学金制度

返済遅れで取り立ても

■現状

今年度から始まった政府の奨学金などを含め、日本の奨学金の交付総額は、公的・民間合わせて平成25年度に1兆2144億円。うち支給総額1兆933億円と、全体の約9割を支給するのが日本学生支援機構(発足2004年)だ。政府出資の独立行政法人で、前身の日本育英会の時代を含め、これまで大学院や大学などの学生ら約1203万人に奨学金を貸与・給付してきた。同機構の奨学生は16年度の約93万人が28年度に約131万人と増え、日本の全学生の2・7人に1人が同機構の奨学金を借りていることになる。

同機構の奨学金は無利子と有利子の「貸与型」だけだったが、今年度から「給付型」も実施。総額15億円で、2800人が受給予定だ。

一方、貸与型でも無利子のものは成績が優秀な学生で、世帯年収が低い人だけが利用でき、24年度には約40万人が借りた。有利子のものは学力や世帯年収などの一定基準を満たせば必ず借りられ、24年度には約92万人が借りた。このため24年度には貸与型のうち、有利子の利用者が約70%を占めていた。

取材を行った日本学生支援機構市谷事務所(9月27日、東京都新宿区で)=池田花於里撮影

だが現在、同機構は無利子の奨学金を拡充しており、24年度には全貸与者の約30%だった受給者が、29年度には約38%に増えた。

■返済の延滞

「貸与型」は大学卒業後、最長20年かけて返済を行う。ここで問題になるのが延滞者の存在だ。

同機構の場合、28年度末時点での無断で3カ月以上奨学金の返済が遅れている「延滞者」は約16万1000人で、延滞総額は866億円を超える。16年度から延滞者の割合は減少しているが、同機構の場合、返還金が奨学金などの事業資金の約73%を占めるため、返済が滞ると事業規模の縮小などにつながりかねない。

無断で返済が遅れた場合、同機構は3カ月までは文書や電話で返済を促したり、返済の負担を軽減する制度の案内などを行う。同機構によると、多くの場合3カ月以内に入金されるが、3カ月を過ぎると、同機構が業務を委託した外部の債権回収会社が、文書や電話に返事がない人の自宅に訪問。それでも連絡がない場合、裁判所を介して給与差し押さえなどの法的措置を取ったり、奨学金の返済を保証する機関が本人の代わりに返済を行う(代位返済)。後者の場合、延滞者がこの保証機関に借金する形になる。

同機構広報課の種本隆志主幹は、「奨学金を利用する時は、制度を理解し必要以上に借りないことが重要」と話す。また種本主幹は「何らかの事情で奨学金の返済が難しい場合、奨学金返還相談センターに電話してほしい。個人の状況に合わせ返還期限を延ばしたり、返済すべき金額を減らすなどの対応ができる」とも話している。

学生の声

返済20年「結婚ためらう」

有・無利子の「貸与型」奨学金が社会に出ても払えず、自己破産する社会人が増えている。NHKの番組「クローズアップ現代+」によると、日本全国で奨学金が払えず自己破産した人数は累計で約1万人。裁判所から返済の督促を受ける事例は昨年度、約8400件と10年で40倍に急増している。

このような状況を受け本紙は、筑波大で「貸与型」奨学金を受ける学生2人に取材。奨学金を利用する人ならではの苦悩などを取材した。

■学費は奨学金で

1年のAさんは、4月から有利子(10月現在の利率0・01%)の「貸与型」奨学金を月10万円、日本学生支援機構から借りている。「大学費用は自分で出したい」と考え、両親と話し合った結果だ。

奨学金の使途は入学金(28万2000円)や授業料(年53万5800円)など。自宅通学の定期代(3カ月6万4190円)も奨学金からだ。両親からの小遣いもないが「勉強に集中できるよう、アルバイトはあまりしていない。アルバイトで学費を稼ぐという考えはなかった」。目標は大学教員。「奨学金のうち、授業料や定期代を支払った残りは大学院への進学費用として貯めている」という。

だが「大学院に進学すると、奨学金の完全返済まで20年かかることがとても不安だ」と話す。「博士号を取得しても大学教員になれるとは限らない。奨学金の返済を考えると、結婚を考えることもためらう」と語った。

■母子家庭

2年のBさんは、13歳で父親を亡くし母子家庭に育った。現在、日本学生支援機構から無利子の「貸与型」奨学金を月3万円、民間団体の「給付型」奨学金を月1万円利用している。

「奨学金のおかげで勉強できる」

昨年の4月~9月は、民間団体の「貸与型」奨学金を無利子で月4万円借りていたが、支給団体が求めるボランティア活動の負担が大きく、辞めたという。

現在Bさんは、中、高校の教員免許や社会教育主事、学芸員などの資格を取ろうとしている。平日はほぼ授業で、土、日曜も集中授業や実習でアルバイトは難しい。だが、「奨学金のおかげで資格取得の勉強を諦めずに済んだ」と話す。現在は、これらの空き時間に家庭教師と学内のアルバイトを行っている。

学費は昨年度は全額、今年度は半額免除となった。このため、実家が学費として用意してくれた資金やアルバイトの給料などをやりくりし生活している。だが、今後、学費免除の選考に外れる可能性もあるため、同機構からの「貸与型」奨学金には極力手をつけていない。

大学院進学も考えるが、その場合実家の支援はなくなる。大学院の学費に奨学金の残りを充当することも考えるが今後、学費免除がなければ大学院進学もどうなるか分からない。

Bさんは「奨学金のおかげで、今は将来を諦めずに勉強ができる。2年目も宿舎に住み自炊でやりくりするが、学費免除がなくなったら不安だ」と話した。

識者の声

大内裕和教授

奨学金問題は社会全体の問題

日本の奨学金が抱える問題などを「奨学金問題対策全国会議」の共同代表を務める中京大学の大内裕和教授に聞いた。(聞き手・木村誠)

――アンケート結果をどう見ますか。

一番注目したのが、筑波大生の6割以上が奨学金の返済を不安に思っている点だ。その理由として「(将来)安定収入を得られるか分からないから(返済できないかもしれない)」と答えた人が半数以上もおり、多くの学生が卒業後の就職と雇用に不安を覚えていることが分かる。また、筑波大生の約半数が給付型奨学金を希望していることも注目点だ。卒業と同時に何百万円もの借金を背負うことへの不安があるのだろう。

――奨学金問題は根が深いのでは。

問題は雇用や賃金の問題と直結している。賃金が年齢に応じて上昇する「日本型雇用」の崩壊で保護者の収入が減り、学生が借りる奨学金の額が増えている。さらに卒業後、就職しても賃金が年齢とともに上がる確証はなく、確実に奨学金を返済できるかの見通しがつかなくもなっている。

――貸与型奨学金では延滞が問題になっています。

日本学生支援機構の貸与型奨学金の場合、返済が滞ると「取り立て」業務を債権回収業者に委託し、その後裁判に発展するケースもある。同機構は返済の一時猶予の制度などを設けているが、結果的には「無茶をさせて」返済させるケースもある。そもそも学生は、同機構の奨学金を将来の所得が決まってない状況で借りている。返済できないのは自己責任と断定するのは問題だろう。返済が滞るのは本人だけの問題ではなく、奨学金制度のあり方や若者の雇用環境の悪化が関係している。

――政府が給付型奨学金を創設しました。

ようやくスタートラインに立ったという印象。ただ、条件、人数ともに全く不十分。政府は現在の貸与型奨学金を原則、給付型に移行すべきだ。アンケートでは財源を心配する声もあったが、富裕層への課税を強化することで財源は確保できるだろう。

「給付型」開始

低所得者への支援を拡充

政府の動き

文部科学省によると国の奨学金事業は日本学生支援機構が行っており、前身の大日本育英会が1943年に開始。これまでは無利子か有利子（2017年3月時点の固定金利0・33％）の「貸与型」だけだったが、今年度から「給付型」も創設した。保護者の世帯年収や成績などの基準を満たし、私立大学に自宅以外から通学する人や児童養護施設にいた人など2800人に限定して支給した。だが来年度からは国公立大学の進学者や自宅からの通学者にも対象を広げ、2万2800人に給付の方針だ。予算は今年度15億円になる。

公的な「給付型」奨学金

	国公立大（授業料全額免除 なし）	国公立大（授業料全額免除 あり）	私立大
自宅通学	2万円	0円	3万円
自宅外通学	3万円	2万円	4万円

同省によると給付型の奨学金は、収入が一定基準を下回る世帯の生徒から成績優秀な生徒を高校などが推薦して選出。給付月額は▽国公立大に進み、自宅から通学する学生は2万円▽国公立大に進学し自宅外から通学する、または私立大に進学し、自宅から通学する学生3万円▽私立大に進学し、自宅外から通学する学生4万円……だ。ただ、国立大で授業料の全額免除を受ける学生の場合、自宅外からの通学では2万円に減額。自宅から通学する学生は給付の対象外となる。

これらの実施の背景には、低所得者世帯で高等教育への進学を諦める生徒が多いことがある。同省の2012年の調査によると、4年制大学へ進学する割合を各世帯の年収別にみると、年収1050万円以上の世帯が62・9％なのに対し、年収400万円以下の世帯は27・8％。日本の国公立大の授業料は、16年の統計で先進国35カ国で構成するOECD（経済協力開発機構）加盟国で2番目と高く、低所得者の進学を妨げる一因となっている。

また同省によると、給付型の公的奨学金のほかに、今年度から無利子の「貸与型」奨学金も拡充した。このタイプは成績が優秀で世帯年収が一定基準以下の場合、受給資格があるが、28年度の場合、予算不足から申請学生約50万人の4・8％（2万4000人）が、条件を満たしながら受給できなかった。

そこで政府は今年度から予算を増額。成績・収入の条件を満たす全員が受給できるようにした。また収入が一定基準を下回る世帯の学生は、成績に関わらず誰でもこのタイプの奨学金を受給できるようになった。

同省高等教育局学生・留学生課の八島崇課長補佐は「奨学金制度の拡充で、経済的な理由で進学をためらう人の進学を後押ししたい」と話している。

視点

使いやすい奨学金を

国は「教育無償化」の一貫として今年度より初めて返済不要である公的な「給付型」奨学金を実施した。また、返済が必要な「貸与型」奨学金でも、無利子の奨学金を拡充している。奨学金が大きく変わろうとしている。

しかし、現在の奨学金の政策は、奨学金を借りる当事者である学生の声を反映しているといえるのだろうか。筑波大生へのアンケートでは、半数の学生が給付型の奨学金を希望しており、無利子の奨学金を希望する学生の2倍だった。卒業後に利子の有無に関わらず「借金」を負うことを嫌う学生の姿が目に浮かぶ。

また、学生生活課によると、奨学金を利用している筑波大生は年々減っているという。現状の日本学生支援機構の「貸与型」奨学金は学生にとって「使いにくく」なっているのだ。

一方で今年の国立大学の授業料の標準額は約53万円。30年前の約30万円から約8割も増えた。保護者の平均年収は平成12年度の461万円を境に減少傾向にあり、家庭の教育費負担は大きくなっている。

現行の奨学金制度が今の状況にそぐわなくなっているのは明らかだ。政府はオーストラリアの制度を参考に、国が授業料を負担し、卒業後に所得に応じて返済してもらう「出世払い方式」の奨学金を導入する検討もしているが、これも学生にとって「借金」であることに変わりはない。学生の意見も取り入れ、利用しやすい奨学金制度への抜本的な見直しを政府に期待したい。

（木村誠）

催事

国際シンポ「地域に根差した自然保護」

11月23日（木・祝）に国際シンポジウム「地域に根差した自然保護 Local Community and Nature Conservation」が筑波大学東京キャンパス文京校舎134号室（東京都文京区）で開催される。

国内外より6名の専門家を招待し、世界の自然保護活動と地域社会との関係についてさまざまな事例を紹介する。また、筑波大大学院生によるポスターセッションも開催される。

開場は午前9時30分で、開催時間は午前10時から午後5時まで。参加費は無料。定員は150名。同時通訳あり。

問い合わせ＝筑波大学大学院自然保護寄附講座事務室
電話：029―853―6344
ホームページ：http://www.conservation.tsukuba.ac.jp/jog5qv5wi-15/#_15

HELLO! 先端科学

芝生や雪上の歩行を再現

現代人の運動不足を楽しく解消

橋本悠希助教

普段私たちは通勤通学などで舗装された道を歩くが、それは大部分が単調な運動に終始する。だが舗装道路を歩いていても、芝生などの上を歩く感覚を味わうことができれば、通勤通学も楽しくなる。またこれで歩くことが好きになれば、運動不足も解消できるだろう。こんな発想から、橋本悠希助教（シス情系）はユニークな装置の研究を行っている。

これまで、装置を指の爪の上に乗せ振動を与えることで、それが指の腹部に伝わるという技術が開発されていたが、橋本助教はこれを足に応用。足の甲にわずかな振動を与えることで、固い地面を歩いているにも関わらず、まるで本当に雪や芝生の上を歩くかのように感じ取られる装置の開発を目指した。これに加え、装置の小型化・軽量化も図った。この結果、約30㌘で大きさはスリッパに乗る程度の装置の開発に成功。一定以上の重さがあると不可能だったものを、足の爪に直接取り付けるような装置を生み出した。

このユニークな研究の背景には橋本助教自身が運動不足を感じ始めていることがあった。新たにスポーツを始めるのが億劫なのは人の常。だが、単調な「歩く」という運動でも、砂漠や芝生、そして雪や雲の上など、非日常的な感覚を味わえれば、歩く距離が少しでも伸びるのではないかと考えた。この着想は、コロンブスの卵だった。

すでに、実用化の計画も進んでいる。つくば駅周辺でこの装置を使い面白い試みが行われる予定だ。現在の地図と古地図のデータを組み合わせ、現在は舗装された道路でも、古地図が作られた当時の地面の様子を足の裏で「知る」催しだ。他にも、触覚アイコンの計画も進んでいる。視覚障がいのある人が街中で歩いている際に、トイレなどのある場所を、足底に特定の刺激を感じることで知覚できるというものである。

今後は装置をさらに小型化・軽量化し、靴下のような手頃さで日常的に身につけられるような装置にし、製品化を目指していくという。橋本助教は「人の日々の歩くという運動を、手軽にもっと楽しめるものにしたい」と話す。

2013年の笹川スポーツ財団（本部・東京都港区）の調べによると、日本人に最も親しまれている運動は、散歩などの「歩く」運動。日本人が運動不足を楽しく解消できる日も近い。（柏このか＝比較文化学類1年）

現在開発中の装置＝橋本助教提供

手紙

サッカー選手から陶芸家へ

陶芸家
戸田 浩二さん

私は、茨城県笠間市で陶芸家として活動しています。大学時代はサッカーばかりやっていたのに、なぜ陶芸家になったのでしょうか。

中学時代に、サッカー雑誌で筑波大学蹴球部の特集記事「食う寝るサッカー」を読んで桐の葉のユニフォーム姿に憧れ、進路希望にはすでに筑波大体育専門学群と書いていました。

地元の高校を卒業後、体専に入学しましたが当時の蹴球部は関東リーグ戦で3連覇し、卒業生は毎年4～5人がJリーガーになり、部員は100人を超えて人気実力ともに大学ナンバーワンでした。一番下のチームからのスタートでしたが、入試の面接で「4年生でレギュラーになってJリーガーになります」と宣言した目標を達成するために大学4年間はサッカーにひたすら打ち込みました。

ですが、常に劣等感があり自己中心的で、いい意味でも悪い意味でもギラギラしていました。結果的には、公式戦に2試合出場できましたがレギュラーにはなれず、卒業後プリマハムFC土浦（水戸ホーリーホックの前身）で1シーズンプレーした後にサッカーでの挑戦は終了しました。

今振り返ると、一つのことを全力でやった達成感はありますが、もっと大学のほかの分野の方々と交流して視野を広めておけば良かったと思います。

その後、半年間、冬山に籠って雪かきのアルバイトをしている時にたまたま勧められて軽い気持ちで陶芸を始めました。それまで美術には全く興味がなかったのですが、すぐに形を作ることが楽しくなってきて次の3つの理由で陶芸に挑戦しようと思いました。①自然のもの（粘土、薪、炎）を使うこと。②自分一人の責任で制作できること。③1万年以上の歴史があり、奥が深く世界に通用すること。そして、笠間焼の陶芸家に弟子入りし5年間の修業後、独立して自分の窯を持ち15年が経ちました。この間にたくさんの出会いに恵まれて自分の作品を制作、発表することができています。私にとって美しいものとは、心地良い緊張感があり静かな空間を作ることができるものです。古代の仏像のような普遍的な美しいものを作りたいと思っています。

現在は、東京やニューヨークのアートフェアやギャラリーで個展を開催しており、アメリカの3つの美術館で作品が所蔵されています。また、タイでの王室関連財団で麻薬撲滅のための陶芸指導や、笠間市教育委員会の教育委員もしています。

陶芸とサッカーとの関連については、ロクロで形を作る時により良い形ができるように考えながら取り組むことが必要なのですが、サッカーでの反復練習で培った集中力と持続力が大変役立っていると思います。

また、現在Jリーグや高校で指導者として活躍している大学時代の仲間たちが、「今サッカーに全力で取り組んで自分に向き合う経験をすることは必ずほかの分野でも役立つよ」と私のことを話してくれているそうです。

そして、私が筑波大に進学していちばん良かったことは、妻と出会ったことです。体育の授業でグラウンドにいた彼女に声を掛けたことがきっかけです。現在は自宅から500㍍以内には民家が無い、人里離れた山の中で子ども3人とヤギ2頭で楽しく暮らしています。

最後に、大学生活真っ最中の皆さんが自分の好きなことに没頭して素敵な出会いがあることを祈っています。（平成7年度体育専門学群卒）

関東秋季リーグ 男子 8勝3敗で準優勝

バレー・

【専修大学生田キャンパス総合体育館（川崎市）で佐藤巧基＝物理学類2年】
12大学が争う関東大学秋季1部リーグが9月9日から10月15日に開催され、昨季4位の筑波大は8勝3敗で準優勝に終わった。また、主将の中根聡太（体専4年）が敢闘賞を受賞した。

10月15日に行われた東京学芸大戦では、第1セットから秦耕介（同4年）の強烈なジャンプサーブで流れをつかみ、3－0でストレート勝ちを決めた。

第1セットは、序盤から秦のサーブで相手の守備を崩し、ブロックで仕留めるプレーなどで5連続得点を奪った。そのまま試合の流れをつかみ、25－12でセットを先取した。

第2セットは、序盤は拮抗したが、中盤の田城広光（同3年）の鋭いスパイクや小澤宙輝（同2年）のサービスエースで差が開き25－16でセットを連取。

最終セットは相手のスパイクが決まり始め、終盤まで接戦が繰り広げられたが、筑波大の高さを生かしたブロックが終盤に再び決まり、26－24で快勝した。

主将の中根聡太（同4年）は「スパイクが決まりやすいように相手のブロックを散らすトス回しを意識した」と話した。また、秋山央監督（体育系・助教）は「選手が対戦相手をよく分析していたことが勝利につながった」と話した。

相手のブロックをかわしてスパイクを狙う田城（10月15日、東京学芸大戦で）＝井手真琴撮影

観戦記 守備力強化が課題

筑波大の秋季リーグは8勝3敗で準優勝に終わった。リーグ戦直前、秦耕介（体専4年）や秋山央監督（体育系・助教）らが、8月のユニバーシアード（台湾）の日本代表に選ばれ、リーグ前にチームでの練習が思うように重ねられず、リーグ戦の前半2試合を落とした。秋山監督は「チームの状態が分からず2敗してしまった」と話す。

練習不足は特に守備に大きく出た。リーグ優勝校、早稲田大との対戦ではフルセットの接戦の末、ブロックなどの守備が原因で負けたと選手たちは話す。小池勇輝（体専4年）は「ブロックに高さはあるが、レシーブとの連携がまだできていない」と話す。

だが、試合を重ねるにつれて少しずつ守備の連携も改善してきたという。リーグ最終戦の東京学芸大戦では、ブロックで相手のスパイクの方向を誘導してレシーブする場面が見られた。主将の中根聡太（体専4年）は「守備をインカレ（全日本学生選手権）までに完璧にする」と意気込む。

11月には大学日本一を決めるインカレを迎える。守備力強化が制覇の鍵を握る。（佐藤巧基）

ブロックとレシーブの連携が課題だ（10月15日、東京学芸大戦で）＝井手真琴撮影

史上最高・I難度の新技成功 宮地秀享

10月9日（日本時間）にモントリオール（カナダ）で開催された体操の世界選手権で、I難度の新技「伸身ブレットシュナイダー」を成功させた宮地秀享（体育1年）が本紙のインタビューに応じた。「これまで期待されたことがなかったのでとても緊張した」「東京オリンピックでは金メダルを取りたい」――。世界選手権の感想や今後の目標などを聞いた。（聞き手・明石尚之＝体育専門学群2年、写真も）

新技の成功率はまだ半々、精度を上げていきたいと語る宮地（10月30日、5C棟で）

――初出場となった世界選手権を振り返って。

これまで大きな成績を残せなかったため、ここまで期待されたことは初めてで、とても緊張しました。体操競技の代表選手は、メダルを取って当たり前と思われることが多い。代表候補合宿から約3カ月間、精神面で辛い時期が続きました。しかし、大舞台を経験し、課題も見つかり多くの収穫がありました。

――「伸身ブレットシュナイダー」をやろうと思ったきっかけは。

世界で戦うためつかんだ新技

大学3年の時に遊び心でブレットシュナイダーをやったのがきっかけです。その時はすぐに諦めましたが、卒論でブレットシュナイダーを研究したことで、コツをつかむことができました。その結果、4月の全日本個人総合選手権で初めて成功することができました。しかし、世界で戦うにはこの技だけでは足りない。伸身でこの技をやらないといけないと思いました。

――中高一貫の私立茗溪学園で非常勤講師をされており、大学院生としての学業もあり競技との両立が難しいと思いますが。

確かに練習時間の確保は難しいです。今はだいたい週に3日、1.5時間しかできないので大学生の時に比べて半分以下になりました。

しかし、練習時間が限られるため、かえって短い時間で集中して取り組むようになった。この質の高い練習のおかげで世界選手権に出場することができたと思っています。

――今後の目標は。

2020年東京オリンピックの鉄棒で金メダルをとることです。ただ、自分はまだ22歳。内村航平選手（リンガーハット）が28歳で個人総合に出場している中で、自分が種目を鉄棒一本に絞るのはまだ早い。全ての種目に挑戦しながら、伸身ブレットシュナイダーを常に決められるようになりたい。

今回の世界選手権でも完璧な演技ができていれば、金メダルは狙えたと思う。伸身ブレットシュナイダーはまだ半々ほどの成功率なので、その精度を上げていきたい。そして、内村選手のように勝つべき時に勝てる選手になりたい。

◆宮地秀享（みやち・ひでたか）
1994年11月12日生まれ、愛知県出身、22歳。2013年に筑波大に入学。16年に全日本種目別選手権鉄棒で5位、17年全日本種目別選手権鉄棒で2位。17年より茗溪学園で非常勤講師。168センチ、63キロ。

関東大学リーグ 好調維持し首位

サッカー・

【味の素スタジアム西競技場（東京都調布市）で小宮山瑛生＝社会学類3年、写真も。12面に関連写真】

4月から行われていた関東大学リーグが佳境を迎えている。残り4節を残して首位に立っている筑波大は10月28日に慶應義塾大と対戦し5－0と大勝を収め、優勝に向けて更に勝ち点を積み重ねた。

チャンスを生かせずに拮抗した展開を変えたのは筑波大だった。前半32分、右サイドでボールを受けた会津雄生（体専3年）がゴール前に上げたボールに中野誠也（同4年）が頭で合わせゴール。得点ランキングでトップを走るエースのゴールで先制点を獲得。

36分にはコーナーキックのこぼれ球を右サイドで受けた西澤健太（同3年）が上げたボールに三笘薫（同2年）が頭で押し込み、前半を2－0で折り返した。

ドリブル突破を図る西澤（10月28日、慶應義塾大戦で）

追加点を狙う筑波大の攻勢は後半に入っても続いた。後半8分には戸嶋祥郎（同4年）からのスルーパスに西澤が反応しシュート。惜しくもキーパーにはじかれるもののゴール前に詰めていた戸嶋がゴールを決めた。筑波大は13分、38分にも追加点を決め5－0で勝利した。

試合後、小井土正亮監督（体育系・助教）は「前半をリードして終え、追加点を取ったうえで相手を0点に抑えられたことはうまくゲーム運びができていた証拠だ」と振り返り、「（現在1位だが）まだ気が抜けない状況は続く。この後の試合をすべて勝つつもりで戦っていきたい」と語った。

箱根駅伝予選会 19位で本戦出場逃す

陸上

【国営昭和記念公園（東京都立川市）周辺で森賀遼太＝社会学類1年】
49大学が争う東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）予選会が10月14日に行われ、筑波大は10時間23分43秒で19位となった。1月の本戦への出場は果たせなかったが、相馬崇史（体専1年）が1時間56秒で全体の69位に入り、関東学生連合チームに選出された。11月の日本体育大学長距離記録会、10000メートル記録挑戦競技会の結果で16人中10位に入れば、本戦出場が決まる。

関東学生連合チームに選ばれた相馬（10月14日、国営昭和記念公園で）＝陸上競技部提供

箱根駅伝予選会は、出場校の選手が一斉に出走し、各校の上位10名の記録の合計で争い、上位10校のみが本戦への出場権を得る。走路は全長20キロ。

筑波大は昨年度から約15分記録を縮めて、順位も5つ上がったが、本戦出場にはあと13分足らなかった。前回より2分30秒縮めた池田親（同2年）や予選会初挑戦の西研人（同1年）が部内2位、3位と活躍した。一方で5月末の関東学生対校選手権の1500メートルで3、4位に入賞した小林航央（同3年）、森田佳祐（同4年）は力走を期待されたが、部内11位、10位と結果は振るわなかった。

弘山勉監督は「今年こそは本戦に出場する計画だったが、今年も力を出し切ることができなかった。走力が足りないのではなく、本番で実力を発揮する能力が足りない」と悔しさをにじませた。今後について駅伝主将の河野誉（同4年）は「10位の学校とは選手層の厚さなどが根本的に異なる。地道に力をつけていくしかない」と語った。関東学生連合チームに選出された相馬は「関東学生連合チームに選ばれるという目標を達成できて安心した。筑波大のユニフォームを着て走る学校の代表としても頑張りたい」と力強く意気込んだ。

全日本学生選手権
女子 団体戦4連覇

第１ダブルスで貫禄のある試合運びを見せた加藤（手前）、柏原（奥）ペア（10月22日、龍谷大戦で）

バドミントン

【一宮市総合体育館（愛知県一宮市）で明石尚之＝体育専門学群2年、写真も】全日本学生選手権（インカレ）が10月20日―26日まで行われた。筑波大女子は決勝で龍谷大に勝利し、団体戦4連覇を果たした。

22日の準決勝では9月の秋季リーグ戦で敗れた明治大を3―0で破り、決勝に駒を進めた。同日に行われた決勝戦では龍谷大と対戦。第1、第2シングルスの連勝で流れをつかみ、3―0で優勝を決めた。

第1シングルスでは安田美空（体専2年）が嶺井優希と対戦。第1ゲームは緊張から体が動かず、9―21で落とした。第2ゲームは拮抗した戦いとなったが、豊富な運動量で終盤に粘りのプレーを見せ、21―16で奪い返した。そして第3ゲームも21―17と接戦をものにし、2―1で初戦を制した。

第2シングルスでは香山未帆（同1年）が「観客の声援から力をもらいたい」と、コート選択では観客が見えるコートに決めた。狙い通り序盤から筑波大の応援席からの声援で勢いに乗り、第1ゲームを21―16で先取した。

だが、第2ゲームでは相手のサーブに対応できず、18―21で落とした。最終ゲームではデュースまで持ちこまれるも、最後まで気持ちを切らさず、25―23の大接戦を制した。

勝てば4連覇の決まる第1ダブルスでは加藤美幸（同4年）・主将の柏原みき（同4年）ペアが昨年のインカレ個人戦で敗れた龍谷大の牟田香菜子、山藤千彩ペアと対戦。序盤から積極的に声を出し、相手を圧倒。2―0で勝利し、インカレ4連覇を果たした。

1、2年生の活躍光る

吹田真士監督（体育系・助教）は「一人ひとりが責任感を持って試合に臨めていた。ベストメンバーで臨めたし、私自身も負けたくないという気持ちが強かった」と語った。

記者の目

「肩の荷が下りた」。試合後、主将の柏原みき（体専4年）は安堵の気持ちを語った。勝利の瞬間、柏原が浮かべた涙は決して平たんではなかった4連覇への道のりを物語っていた。

9月に行われた秋季リーグ戦、香山未帆（同1年）がけがで出場できなかっただけでなく、加藤美幸（同4年）、柏原ペアがユニバーシアード（台湾）などの遠征で直前まで練習に参加できなかった。主力の不在でチームはまとまりを失い、敗北を重ねた。

結果的に6季連覇を目指しながら最下位に沈んだ。チームは全日本学生選手権（インカレ）優勝を目指せる状態からは程遠く、柏原は「主将としてチームをまとめられなかった」と自らを責めた。

第２シングルスで厳しい姿勢から粘りを魅せる香山（10月22日、龍谷大戦で）

伝わった主将の思い

だが、「悔いが残らないようやれることは全てやろう」と気持ちを切り換えた。まとまりを失ったチームを一つにするため、部員とミーティングを重ねた。インカレに向けて一人ひとりがチームのために何ができるか徹底的に話し合った。

試合に出場できない部員は相手選手の情報収集やスコアの分析など、試合に臨むメンバーを献身的に支えた。主務としてチームに貢献した牛木鮎子（同3年）は「4年生の勝ちたいという思いは伝わっていた。その気持ちに応えたかった」と話した。

団体戦決勝、第1シングルスの安田美空（同2年）、第2シングルスの香山とともに接戦を制したが、勝敗を分けたのはチームのため自分の役割を果たすという強い思いだった。「勝って4年生ペアにつなぎたい一心だった」という香山の言葉に、安田も大きくうなずいた。

「チームを一つにしたい」という柏原の思いはチーム全体に確かに伝わっていた。部員一人ひとりがチームのためにできることを確実にこなした結果、今回の4連覇につながった。

柏原を中心に一つにまとまり、秋季リーグ戦最下位というどん底から這い上がった。柏原の思いを受け継ぐチームへ、そして大学バドミントンを引っ張る存在へと、筑波大は再スタートを切った。（明石尚之）

記録ファイル

◆柔道 ◇全日本学生体重別選手権（9月30日―10月1日）【男子】▽60㌔級 大島拓海（体専3年）準優勝▽66㌔級 末木貴将（同4年）、田川兼三（同3年）3位▽73㌔級 野上廉太郎（同1年）優勝、石郷岡秀征（同1年）準優勝、五十嵐純平（同4年）3位【女子】▽52㌔級 内尾真子（同4年）3位▽63㌔級 能智亜衣美（同4年）優勝▽78㌔超級 粂田晴乃（同1年）3位

2年ぶり13回目の優勝
鹿屋体育大との大接戦制す

つばぜり合いで好機を窺う筒井（左）（10月29日、鹿屋体育大戦で）

剣道
全日本学生優勝大会

【日本武道館（東京都千代田区）で山本颯＝比較文化学類2年、写真も】大学団体日本一を争う全日本学生優勝大会が10月29日に行われ、筑波大が2年ぶり13回目の優勝を果たした。決勝の鹿屋体育大戦は、代表戦までもつれる大接戦となったが筒井雄大（体専4年）が勝利し、優勝を決めた。

準々決勝の駒沢大戦、準決勝の別府大戦をともに大勝し、勢いそのままに決勝にコマを進めた筑波大。その相手はくしくも、一昨年の同大会決勝で激戦を繰り広げた宿敵、鹿屋体育大となった。

先鋒戦から大将戦までの7戦では両大学ともに一本をとることができず、すべて引き分け。優勝の行方は時間無制限の代表戦に委ねられた。

筑波大の代表は大将筒井。鹿屋体育大の大将、真田裕行（4年）との再戦となった。序盤は相手が得意とするコテを警戒。隙を生まないように慎重に攻め、つばぜり合いを繰り返した。その後も思い切った技が出せず拮抗した展開に。しかし、開始9分、つばぜり合いの体勢から互いに離れた後、相手のわずかな後退を見逃さなかった。すかさず得意のメンを打ち込み、一本。2年越しの栄冠を勝ち取った。

筒井 会心のメン

試合後、筒井は「メンしかないと思い最後に決めた。大学最後の大会で優勝できて満足している」と語った。

鍋山隆弘監督（体育系・准教授）は「今年は4年生に強い選手が多く、彼らが後輩たちを引っ張ったおかげで優勝できた」と振り返った。

スポーツの顔

日本一になるため筑波大へ

昨年、主要大会3冠を成し遂げた筑波大バスケットボール部。王者として臨む今年のチームを、2年生ながら思い切りのよいプレーで勢いづける。

抜群の身体能力を生かして得点とリバウンドを量産し、パスも高いレベルでこなすオールラウンダー。吉田健司監督（体育系・准教授）も「チームの中心となる存在」と期待を寄せる。

小学1年生で、バスケットボール経験者の父の影響で競技を始めた。中学2年生の時には地元・埼玉県の選抜に選ばれるなど当時から高く評価された。

そして中学3年生の時、多くの名門校から推薦の誘いを受ける中、福岡大学附属大濠高等学校への入学を決断。同校の片峯聡太監督（平成21年度体育専門学群卒）の「一緒に日本一になろう」という言葉が決め手だった。

入学当初から主力として活躍。また、U―16日本代表に選出され、アジア選手権で日本を銅メダルに導いた。

2年生になると高校の主要大会であるインターハイ、ウインターカップでそれぞれ優勝、準優勝を果たした。

だが、すべてが順風満帆だったわけではない。主将に就任した3年生時にはインターハイ、ウインターカップともに優勝候補の一角と言われた。しかし、結果はどちらも緒戦敗退。「本当にショックだった」と振り返る。「接戦で流れの悪い場面でチームをまとめきれなかった」と、主将としてチームを引っ張ることの難しさを学んだ。

インカレ４連覇目指すバスケ部のホープ
牧隼利（はやと）（体専２年）

自分の代で日本一を達成できなかった悔しさから、「大学では日本一になりたい」と当時全日本大学選手権（インカレ）2連覇を果たしていた筑波大に進学した。

入学後すぐベンチ入りしたが、昨年3冠を果たしたチームは選手層が厚く、出場機会に恵まれなかった。しかし、試合に出られない中でも、現在Bリーグで活躍する馬場雄大（体専4年）らと質の高い練習を重ねた。「試合に出られず悔しかったが、その分練習に身が入った」

そして、今年はチームにとって欠かせない存在に成長。優勝した5月の関東大学選手権では、接戦となった大東文化大戦で途中出場ながら14得点、12リバウンドをマークした。

また、6月の新人戦では1、2年生チームの主将として臨んだ。準々決勝の日本大戦では延長戦の末に6点差で惜敗。「接戦でチームをまとめられず、高3時の失敗を繰り返してしまった」と振り返る。

しかし、気持ちを入れ替えて臨んだ5位決定戦の青山学院大戦では、常に声を出し続けチームを引っ張った。さらに、17得点、10リバウンド、13アシストを決め、勝利に大きく貢献。「自分の理想の形が出せた。主将としても日本大戦の反省を生かせた」と新人戦での成長を語る。

先月の関東大学リーグ戦では、全試合スタメンで出場し主軸としてチームを引っ張った。

今月末には4連覇の期待がかかるインカレを迎える。「強豪校の実力が拮抗する今年は接戦で勝ち切る勝負強さが必要。常にチームを引っ張る意識を持って臨みたい」（益本健太＝人文学類2年、写真も）

学生宿舎のインターネット
9月から速度低下

筑波大学の平砂、追越、一の矢、春日、グローバルヴィレッジ各学生宿舎で無料利用できるインターネット（有線・無線）について、入居学生から「通信速度が特に夜間、大幅に低下する」との苦情が管理業者に寄せられていたことが分かった。業者の調査では回線の混雑が原因とみられ、対策を講じているが、完全な解決には至っていない。業者側は「入居者に迷惑をかけ申し訳ない。解決に向けて対策を続けている」と話している。

（木村誠、写真も）

各居室にある接続装置（10月31日、平砂学生宿舎で）

宿舎のネットはこれまで学術情報メディアセンターが管理していたが、今年度から同センターの業務負担軽減などを目的に民間業者に業務を委託していた。業者によると問題は9月中旬、入居学生の問い合わせで判明。9月には6件の問い合わせがあった。業者の調査では、宿舎のネット機器に故障はなく、回線を増やして対応した。業者の担当者は「現在、対策に効果があるか確認中。効果がない場合は別の対策を取ることも検討している」と話した。

本紙で10月28日（土曜日）に実際に平砂学生宿舎でネットに接続し、時間帯ごとに筑波大ウェブサイトの表示までの時間を計ったところ、午後6時の段階では5秒間だったものが、午後10時には1分4秒かかった。また多くの通信量が必要な動画の再生は、午後10時にはほぼできない状況だった。また同時刻にネットの速度を計測すると、午後6時に比べ約200分の1に低下していた。

平砂学生宿舎に入居する学生（人文1年）は、「ネットが遅く、課題の調べ物などで時間がかかり大変困っている。早急に改善してほしい」と不満を漏らした。

東北の食と酒集う
地元の店が魅力発信

筑波大学生が主催し、東北地方の料理や地酒を屋台で楽しめる「食と酒東北祭り」が、10月14―15日につくばセンター広場（つくば市吾妻）で行われた。祭りには東北地方から22店が参加し、会場は多くの人でにぎわった。

東北地方の料理や地酒を通して来場者に東北地方の魅力を知ってもらうことが目的で、開催は今年で4回目。東北各地の地酒のほか、青森県の黒石やきそばや、岩手県の魚介の浜焼きなどが販売された。今年で3回目の参加となる佐々木酒造店（宮城県名取市）の佐々木洋さん（41）は「私たちが作っているおいしいものを始め、今の東北の魅力を広く知ってもらえるありがたい機会だ」と話した。

また、会場には東日本大震災の概要や東北各地の祭りを紹介する展示のほか、VR（バーチャルリアリティ）で東北地方の名所を体験できるブースも設置。

東北の地酒を販売する酒造業者（10月15日、つくばセンター広場で）

ステージでは、岩手県大船渡市出身の歌手「LAWBLOW」や、筑波大のアカペラサークル「Doo―Wop」のライブなどが行われ、会場を沸かせた。

実行委員会代表の黒田枝里さん（生資4年）は、「東北のお店の方々が直接出店してくれることがこのイベントの魅力。来場者には、食事やお酒だけでなく、お店の方々との交流も楽しんでほしい」と話した。

（池田花於里、写真も）

放置自転車の使用も罪に
学生に事情聴取も

他人の自転車を「放置された」「捨てられた」などと思いこんで使い、窃盗や占有離脱物横領罪の疑いでつくば中央署の事情聴取を受けた筑波大学生の存在が同署への取材で明らかとなった。学生に「盗んだ」という意識はなく、放置や捨てられた自転車を「拾った」という認識で、有効活用の感覚だったという。だが、同署では「防犯登録で別の人の所有と分かれば、罪に問われることもある」と注意を促している。学生の大部分は保護者からの依頼で大学側が警察から身柄を引き取っている。

（橋野朝奈＝日本語・日本文化学類3年、小宮山瑛生）

学内で乱雑に置かれた自転車（10月31日、春日エリアで）＝竹添そら撮影

同署などによると1人は、学生宿舎のゴミ捨て場で自転車を拾い、そのまま約2カ月間使っていたが、大学付近で巡回中の警察官に職務質問を受け、自転車の防犯登録から他人のものと判明。同署で事情聴取を受けた。結局、大学側が身柄を引き取ったという。また、ほかの学生は昨年、大学構内の放置自転車を修理。約10カ月間使っていたが、同様に職務質問及び事情聴取を受け、結局、親が身柄を引き取ったという。

このほか放置自転車を持ち帰った学生が翌月、同様に職務質問及び事情聴取を受け、大学側が身柄を引き取ったケースもあった。一方、大学内の駐輪場で未施錠の放置自転車と思われる自転車に乗って帰った学生は、その3日後に、大学内で所有者の学生に声をかけられ謝罪。返却している。

同署などによると、つくば市内の自転車盗難は2013年の479件が16年に709件と増加。これに従い同署もパトカーでの巡回や職務質問を強化しており、同署では「これまで職務質問などは高価な自転車に乗る人を中心に行って来たが、（盗難の増加を受け）普通の自転車でも、積極的に防犯登録などの確認を行っている」と話している。昨年の同時期に事情聴取を受けた学生は1人だった。

この背景には放置自転車や未施錠自転車の多さが指摘されている。不要な自転車は自転車店で引き取りを行うところがあり、費用は約1000円。自治体によっては不要自転車の回収を行うところもある。使用中の自転車でも未施錠などの場合には放置自転車だとされ、盗難被害に遭うこともあるという。

同署は「駐輪の仕方や施錠の徹底など、盗まれない環境を作ることも盗難防止には必要。普段から防犯への意識を高めてほしい」と注意を呼び掛けた。

つくば号150円値下げ
上り線のみ3月末まで

筑波大学と東京駅を結ぶ高速バス「つくば号」の利用者増加と利便性の向上を狙い、首都高速八潮パーキングエリア（PA、埼玉県八潮市）への停車が10月1日から試験的に始まった。また、これに伴い上り運賃の値下げが行われている。期間は来年3月末までで利用状況によってはそれ以降も継続される可能性もあるという。

「つくば号」は1987年に運行開始し、関東鉄道（本社・茨城県土浦市）とJRバス関東（本社・東京都渋谷区）が共同で運行している。しかし、2005年のつくばエクスプレスの開通などが影響し、利用者が減少。関東鉄道の調査によると、今年9月の利用者数はピーク時の05年3月に比べ、8割近く減少している。また、上り線の利用率が下り線に比べ低いことから八潮PAへの停車と運賃の値下げが決まった。

停車が決まった八潮PAはつくばエクスプレス八潮駅に隣接しており、渋滞の多い首都高速を避けて都心部に行くことができる。

筑波大と東京駅を結ぶ高速バス「つくば号」（10月27日、筑波大学中央のバス停で）

また運賃1180円だが利用者の少ない東京駅へ向かう上り線に限り、SuicaやPASMOなどの交通系ICカードを利用すると800円で乗車が可能となる。

来年4月以降の運賃や八潮PAへの乗り入れは未定だが、今後の利用状況によっては継続する可能性もある。今年9月の関東鉄道による調査では、「つくば号」の筑波大学中央、大学会館の2バス停から乗車した人の割合が13・77％だった。関東鉄道総務部企画課の森田玲泉さんは「現在、筑波大学内からの利用者が少なくなっている。路線維持のためにも今回を機に筑波大生にも積極的に利用してほしい」と話した。

（前名裕一、写真も）

キャンパスを彩る秋の数々
広報室が写真展を開催

秋の筑波大学の風景を収めた写真の展示会「筑波大生デジタルフォトコンテスト写真展」が10月6―20日にBiViつくば（つくば市吾妻）のイベントスペースや筑波大サテライトオフィスで行われた。

同展では昨年10月から11月にかけて行われた「筑波大生デジタルフォトコンテスト」で入賞した作品が展示された。同コンテストは秋の季節をテーマに筑波大生からキャンパス内の様子を収めた写真を募集。会場には応募作品252点から選ばれた入賞作品9点が展示。来場者は紅葉風景や秋空などの写真鑑賞を楽しんだ。入賞した写真はこの展示のほかにも「TSUKUCOMM」や「STUDENTS」などの筑波大の広報誌や今年の紫峰会基金のカレンダーにも使われている。

同展を主催した筑波大広報室の大坪龍介さんは「筑波大生の視点から筑波大の広大なキャンパスでの学生生活を紹介してもらうことを目的に始めた。今後も継続していきたい」と話した。今後はすでに行った秋・夏のほかに春・冬の季節をテーマにコンテストを行い、四季をまとめて写真展をしたいという。

（鈴木瑞穂）

留学生の目　韓国

ジャン・ウトゥム

視野を広げてくれた日本

私は昔から空が好きでした。

特に夜空が好きでした。星を見るのも大好きで星座を覚えて自分で探したり、山に星を見に行ったりしました。幼いころには宇宙飛行士や天文学者になりたいと思うぐらい空が好きでした。この頃にはあえて空を見ようとしなくても自然に空が見えました。

しかし時間が経つと共に私の町にも高い建物や高層マンションができ始めたため、どんどん空が狭くなりました。また、街灯や電気が増えたため、星が見えにくくなりました。このような変化によって宇宙飛行士や天文学者になりたいという私の夢も薄くなりました。

その後、私は日本語を勉強し、東京や大阪へ来るようになりました。その時の日本の空は私の地元の昔の空のように広くて奇麗でした。そこで私は「東京や大阪は田舎でもないのになぜ高いビルやマンションが少ないのかな」という疑問を抱きました。その疑問の答えは探せないまま、旅行が終わってしまいました。

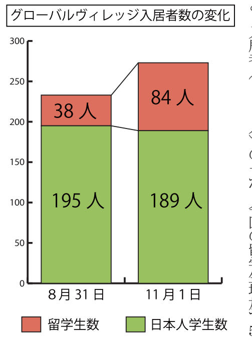
それから時間が経って名古屋の大学に交換留学に行った時、私はやっとその答えを見つけました。答えは新聞の記事の中にありました。名古屋駅の再開発に関する記事で、名古屋駅の拡張のためには地権者と交渉しなければならないという内容でした。これがなぜ高い建物の少ない理由になるのかと思う人もいると思いますが、答えは耐震設計にあるのです。

韓国の場合は地震が少ないですが、それに比べて日本の場合は地震が多いです。だから日本の建物は韓国より耐震設計の基準が厳しく、日本の建物の中でも低い建物より高い建物のほうがもっと厳しい基準で耐震設計されます。それに従って高い建物を建てるためのコストが高くなり、高い建物が少ないのではないかと思いました。

田舎より都市の方が高い建物が多いという事実から先進国であればあるほど高い建物が多いという先入観がありました。だから日本の方が韓国より高いビルや高層マンションなどが多いと思いました。まさに井の中の蛙だったのです。私にとって日本という国は学問を勉強するところだけでなく視野も広げるところです。（日本語・日本文化学類日研生、特別聴講学生、原文も日本語）

グローバルヴィレッジ
日本人だけのユニットも

留学生と日本人学生が5人一組の「ユニット」で共同生活することを目的にした宿舎「グローバルヴィレッジ」の運用開始から半年が経った。「国際交流の日常化」をうたい文句に、日本人学生と留学生の入居比率4対6を目指した宿舎は今、その比率が現在7対3の状況だ。4月以降、まだ日本人しかいないユニットも1つある。同宿舎を検証した。（越智小夏）



学生生活課によると同宿舎には秋学期にも留学生が入り、春学期からの入居者と合わせその人数は計84人と、入居者（273人）の約3割になった。同宿舎は現在60ユニットが稼働しており、春学期には半数近くが日本人学生だけだったが、今回の留学生増加で59ユニットに留学生が住む。

宿舎を問う

秋学期からベトナムの留学生が入居したユニットの男子学生は「共同キッチンで（留学生が）ベトナム料理を作るのを見ると、『異文化との共生』を感じる」と話す。

だがこの一方で、4月から日本人学生がすでに5人入居しており、留学生を受け入れられないユニットも残る。このユニットに入居する学生は「語学力向上のために入居したが、宿舎内で留学生と会話したことがない。交流の機会は全くなく期待と違った」と話した。

同課は「留学生の入居者確保に苦労している」という。原因は留学生の認知度が低いことに加え、利用料の高さ。「一般宿舎の月約2万円に比べ、留学生にとって3万5800円の利用料は高すぎるという声が多い」（同課）という。また、宗教上の理由から共用シャワーを利用できないなど、そもそも共同生活ができない留学生も多い。

同宿舎は2年間の入居を想定し募集している。だが今年度は、応募した留学生が予定数を下回り、半年や1年のみ在籍する留学生も受け付けた。現在は16名の留学生が1年以下の条件で入居している。来年度以降の留学生募集について同課は、「従来の予定通り2年間の入居が見込まれる留学生に限定する方針を考えている」というが、応募者数次第では柔軟に対応する方針だ。

宿舎全体の入居率は、11月1日現在で88・1％。来年度には新たに4棟が完成し、更に190人の入居が可能となる。今後も留学生の入居者確保が課題となるが、同課は「まだ手探りのことが多く、人数や入居条件など、最適なものを見つけていきたい」と話す。

宿舎は約1万3000平方㍍の敷地に3階建ての棟が最終的に11棟建設され、その建築や管理の大部分は、民間業者に委託している。

筑波大生 世界で評価
遠隔操作できる車椅子

世界23カ国の大学生や大学院生などが機能的な工業製品のデザインなどを競う「ジェームズダイソンアワード2017」で、橋爪智さん（図情メ1年）らが制作した遠隔操作ができる電動車椅子「テレウィールチェア」が世界の上位20作品に選ばれた。制作者らは将来的には介護施設などでの導入を目指している。

同賞は英国の家電企業「ダイソン社」の創業者、ジェームズ・ダイソン氏設立の財団主催で、今年で12回目。今年は日本や英国、米国など23カ国から1000点を超える応募があり、うち115作品が国際審査に進んだ。

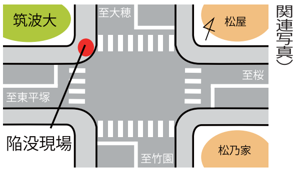
この電動車椅子は、橋爪さん、鈴木一平さん（メ創3年）、髙澤和希さん（図情メ1年）が制作。車椅子のハンドルの上にカメラが付いており、その映像をバーチャルリアリティの装置で見ながら介助者が遠隔操作できるのが特徴だ。この装置は人工知能を搭載したコンピューターとつながっており、カメラで人を検知すると車椅子が自動で停止。衝突を防ぐ仕組みにもなっている。

橋爪さんらによると介護施設などでの導入を目指すが、現在の人工知能の性能では、人との衝突を防げない場合もあり改良の余地があるという。橋爪さんは「審査を通過するとは思っていなかったので、素直にうれしい。車椅子が製品化されるよう頑張りたい」と語った。（秋田耕平）

東大通りで道路陥没

10月29日午後5時ごろ、学園東大通り（県道24、55号）と平塚通り（県道24号）が交差する柴崎の交差点で道路陥没が起きた。陥没箇所は筑波大学側の横断歩道の信号手前で、陥没箇所の地中には、縦約2㍍、横約2・5㍍で深さ約4㍍の空洞があった。つくば市下水道管理課によると、地中3㍍にある老朽化した下水管が割れ、雨水を含んだ下水が地中の土を浸食したことが主な原因という。

この歩道は約3㌢のアスファルトで舗装されているが、本紙が29日に現場を取材したところ、陥没箇所では地上から数十㌢のところまで水が溜っていた。11月1日には緊急工事で陥没箇所は塞がれたが、同課の職員によると、「完全復旧には1カ月ほどかかる」と話した。（秋田耕平、12面に関連写真）



→道路陥没が発生した柴崎の交差点の地図

学生の活動報告
学生や教職員ら40人参加

筑波大学が学生の自主的な活動を支援するT-ACTの上半期報告会が、9月26日にBiViつくば（つくば市吾妻）で行われ、学生や教職員など約40人が参加した。

同会では、今年上半期の8月3日までに実施された22企画のうち、12の企画が活動内容や成果などを報告した。その後、参加者の投票で選ばれた9企画が表彰された。

このうち、最優秀賞に選ばれたのは「はじめてのにほんしゅ」。同イベントは筑波大生に正しく、楽しいお酒との付き合い方や日本酒の魅力を広める目的で7月に行われ、当日は学生24人が参加した。参加者は酒造会社や酒店の店主から日本酒について講習を受けた後、実際に酒を飲み比べた。報告では、イベントの概要以外にも「日本酒を今まで飲む機会が少なかったが、身近に感じることができた」などの参加者の声も紹介された。同企画代表の野中駿宏さん（生資3年）は「学内で酒を飲むという突飛な企画だったが、受賞で企画が認められ良かった」と喜びを語った。

同会に参加した男子学生は「どの企画も興味深いものばかりだった。T-ACTで何かやってみたいと思った」と話した。玉川信一副学長（学生担当）は「何か企画し、運営することは自分の成長につながる。今後もより多くの学生にT-ACTを活用して挑戦してもらいたい」と語った。（秋田耕平）

教育を考える

教育について考えるイベント「EDUCAFE」が10月1日に3C棟で開催された。現役の教員らと筑波大学生が共催し、学生や教員、予備校講師など18人が参加。今後の教育のあり方を話し合った。

今回のテーマは「新しい教育に求められる教員像とは」。文部科学省は近年、子ども自らが課題を探し、追求する姿勢を身につけるような指導を教員に求めている。イベントではまず、こうした傾向を現役の教員が説明。その後、どのような指導が適切かを、グループに分かれて議論した。「生徒がどの学習内容でつまづいているかなど、丁寧に話を聞いた上での指導が必要だ」などの意見が出た。

また参加者らが自由に話し合う時間もあった。数人の筑波大生が現役教員に、生徒を指導する際の苦悩や学生時代にやるべきことなどを質問した。参加したある男子学生は「現役の教員の話を聞けて勉強になった。また参加したい」と話していた。

同イベントを主催した千葉県の高校教師の沼田知紘（ともひろ）さんは「学生からさまざまな意見を聞けて刺激になった」と語った。（南圭）

探訪 tanbō

女子ラクロス部
部の魅力は仲の良さ

西の空がまだ薄暗い朝5時30分ごろ、中秋の多目的グランドを訪れると、部員らはすでに白線引きなどのコート整備にいそしんでいた。毎朝6時には全員が集合し、練習を始めるという。

ラクロスは北米発祥のスポーツ。「クロス」と呼ばれる先に網がついた棒を使ってゴム製のボールを拾いあげ、走って運んだりパスをつなげて敵ゴールを目指す競技だ。ゴールした得点数で勝敗が決まるが、時には1試合で20点近く入るなど点の変動が激しい。終始目が離せない展開が魅力だ。

部員は23名。4リーグ制の大学ラクロス界で同部は現在3部にいる。リーグ戦は毎年夏の全日本大学選手権のみ。来年の同選手権で2部昇格を目指す。

ラクロスは大学生から競技を始める人が多く「カレッジスポーツ」とも呼ばれる。同部も全員が大学から始めた。部長の柴崎雛子さん（体専3年）は「頑張り次第では大学からでもトップ選手を目指すことができる。今まで経験してきた別のスポーツのノウハウが生かせるのも魅力」という。柴崎さん自身、中学と高校で所属していたバレーボール部でのレシーブの経験を生かし、「グラウンドボール」という、地面に落ちたボールをクロスですくい上げる、ラクロスの基本的な動きを得意とする。

全日本大学選手権で活躍する部員ら（10月8日、セキショウフィールドで）＝同部提供

部の最大の魅力は「部員同士の仲の良さ」。部員の谷口愛依（めい）さん（知識図書1年）は「厳しい上下関係はなく、学年問わずみんな仲良し。新歓の時の部全体の雰囲気の良さに惹かれて入部した」と振り返る。

練習の時の声掛けや休憩時間の談笑はもちろん、活動が無い日でも気づけば部員の誰かと行動することが多い。中には学類の全く違う3人で練習場の近くにシェアハウスをする部員もいる。

夏のリーグ戦の直前には、各学年の部員がほかの全学年の部員に手作りのミサンガやお守りを贈り合うのが伝統だ。「これまでの3年で9つの贈り物をもらった。その一つひとつから部員らの気持ちを感じて、毎日練習に励む」と柴崎さん。

ラクロスは日本ではまだ歴史が浅く、知名度も低い。だが柴崎さんは「一度試合を見れば、その迫力とスピードに心を奪われるはず。筑波大で試合をすることもあるので、ぜひ観戦に来て、ラクロスに触れてほしい」と話していた。

固い絆でボールをつなぎ、今日もフィールドを駆ける。（竹添そら＝知識情報・図書館学類1年）

Who's Who?

陸上競技部で箱根駅伝出場に挑んだ

武田 勇美（いさみ）さん（人文4年）

箱根駅伝予選会で、本戦出場を目指し力走する武田さん（10月14日、国営昭和記念公園で）＝森賀遼太撮影

10月14日の東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）の予選会で、副主将としてチームを引っ張った。予選会は14人の選手が一斉に出走し、上位10人の合計タイムを競う。筑波大学は10時間23分43秒で惜しくも19位で、10位以上が出場できる本戦への挑戦はかなわなかった。「部員らは大学時代、家族よりも長い時間一緒にいた仲間たち。箱根の舞台でたすきをつなぎたかった」。だが昨年からチーム合計で15分記録を縮め、未来へ思いをつなげた。

駅伝チームは1920年の第1回大会（当時の四大校駅伝競走）では前身の東京高等師範学校が優勝。だが94年を最後に本戦出場をしていない。そこで2011年からは「箱根駅伝復活プロジェクト」が始まった。15年4月には筑波大OBで陸上の強豪・資生堂の監督だった弘山勉監督が就任した。

神奈川県出身。陸上と出会ったのは中学生の頃だ。小学生から始めた野球の傍らで陸上部に入部し、長距離を始めた。「最初は野球のために始めたランニングに、楽しさを感じるようになった」。2年生からは陸上一本に絞り、本格的に練習に取り組んだ。3年生では県大会にも出場した。

高校入学後も陸上を続けた。2年生の9月には3000㍍障害で新人戦の関東大会に出場。8位の成績を残したものの、その後の練習中に疲労骨折し最後の大会直前まで練習できなかった。だが、「このまま陸上を辞める気にはならず、大学で陸上を続けたいと考えるようになった」という。

そんな中、高校の陸上部の顧問（筑波大出身）から筑波大の箱根駅伝復活プロジェクトを知らされた。猛勉強を重ね一般入試で筑波大の人文学類に入学。すぐに陸上競技部に入部した。

駅伝チーム副主将として活躍
箱根へのたすき 未来へつなぐ

だが部には体育専門学群の学生が多く、入学当初のタイムは、部員約30人のうち下から4番目。また授業の都合で練習や合宿の予定が合わず、参加できないことも多かった。「合宿に参加した多くの部員は大きくタイムを伸ばした。参加できないことが悔しかった」と振り返る。

3年生の時からは弘山監督が就任。厳しい「インターバルトレーニング」が始まった。1㌔を3分以内で走った後、200㍍を5分掛けてジョギングするセットを10本行い、その後10000㍍を制限時間内に走る。心底辛かった。

だが、ほかの部員との差を埋めようと、普段の練習後に自主練習として追加で走り込みや筋トレに励んだ。タイムは走る度に縮まった。入学当初は5000㍍が15分40秒だったのが、14分34分秒と部内で2番目のタイムとなった。その実力と実直な人柄が評価され、駅伝チームの副主将となった。

弘山監督の改革は、練習だけに留まらなかった。「チームの結束力を高める」という理由で、私生活でも栄養士が考えた献立を部員が交代で作った。「ここまでする必要があるのか」と疑問にも思った。

だがこの疑問は良い意味で裏切られる。部員の上位10人の10000㍍の平均タイムは約31分から約30分へと1分近く短縮。チーム内の雰囲気も大きく変わったという。

それまでは部員がそれぞれ自分のペースで走るため、部の結束力が弱かった。だが今年の予選会に向けた練習では、厳しい練習を皆で乗り越えた。「皆で強くなってチームでの箱根駅伝を目指したい」という思いがあった。

箱根駅伝に向け、自身の予選の通過がかなわなかったのは事実だ。だが、過去からつないだ「箱根」へのたすきは後輩へとつながれるはずだ。たすきの今後を見続けたい。

（佐々木悠里＝人文学類3年）

編集後記

似鳥鶏（にたどりけい）さんの「100億人のヨリコさん」（光文社）という本をご存知でしょうか。主人公がお金がないゆえに入寮することとなる「富穰寮（ふじょう）」は、平砂宿舎の未改修棟の様子がヒントになったといいます▼学生の貧困は大きな問題です。筑波大学生の奨学金制度の利用状況について調査しました。筑波大生の3割近くが利用している奨学金ですが、その過半数が返済に不安を感じているといいます。奨学金制度の見直しが議論され始めています▼学生の将来への不安は、衆議院選挙の結果にも大きく現れました。出口調査では、小選挙区で自民候補に投票する学生が約7割という非常に興味深い結果が出ました。また、学生が政党で重視した政策は、「景気・雇用」が最多でした。将来に不安を感じている学生が多いということでしょう▼学生が感じているさまざまな不安に今後も目を向けていきます。（副編集長・佐々木悠里＝人文学類3年）

次号は12月11日（月）発行予定です

学内総合

森川亮さん講演

起業について講演をする森川さん（10月4日、共同利用棟Aで）＝産学連携企画課提供

2面へ

学芸

落語研究会 口演会

舞台上に並ぶ落語研究会の会員たち（10月9日、デイズタウンつくばで）＝南圭撮影

5面へ

スポーツ

サッカー 関東大学リーグ

ゴール前にボールを上げる野口（10月28日、味の素スタジアム西競技場で）＝小宮山瑛生撮影

8面へ

学生生活

東大通りで道路陥没

陥没した路面の地中には深さ約4㍍の空洞が広がっていた（10月30日、東大通りで）＝田中開（教育学類4年）撮影

11面へ